

# 樋口五反田遺跡

昭和62年度 緊急地方道整備事業(与地辰野線上伊那郡辰野町下田)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988.3

長野県辰野町教育委員会

## 序

樋口五反田遺跡は、辰野町樋口地区に位置し、天竜川左岸段丘上の50,000㎡にひろがる大きな遺跡で、隣接する樋口内城遺跡とともに早くからその存在が知られ、過去に多くの遺物が採集されてきました。また、昭和47年・48年には、中央道建設工事等に伴って発掘調査が行われ、縄文時代の住居址8基、弥生時代の住居址24基、同じく方形周溝墓2基などが発見されております。特に多量に出土した弥生時代の炭化米は当時のこの地域の稲作を物語る重要な資料となりました。

今回、この遺跡地内に県道と地辰野線開設の工事が施工されることとなり、事前に発掘調査の必要が生じたため、伊那建設事務所の委託を受けて町教育委員会が主体となり、調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代早期の遺物をはじめ、弥生時代の住居址や溝跡など貴重な資料が出土し、大きな成果をあげることができました。

ここに調査報告書を刊行する運びとなり、伊那建設事務所、長野県教育委員会文化課、地元の方々をはじめ、直接調査に従事された調査団の皆様、さらに遺物整理、報告書作成にご尽力くださった方々に深く感謝申し上げます。

昭和63年3月

辰野町教育委員会

教育長 小林 晃 一

# 例 言

1. 本書は、昭和62年度緊急地方道整備事業（与地辰野線上伊那郡辰野町下田）に伴う、長野県上伊那郡辰野町樋口五反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、伊那建設事務所長伊沢修と辰野町教育委員会教育長小林晃一との委託契約に基づいて行われた。発掘調査団組織等の名簿は、発掘調査関係者名簿として別掲してある。
3. 発掘調査は、昭和62年6月1日から7月10日まで実施し、出土品の整理及び報告書の作成は、昭和63年1月11日から3月15日まで行った。
4. 発掘調査現場における記録は主として赤羽義洋が担当し、遺構等の実測図作成は田畑幸男・赤羽やよい・村上茂子が行った。また、本書の作成・編集は赤羽義洋が当たり、遺物等の実測図作成は福島永・赤羽義洋が行った。なお、執筆分担については文末に記してある。
5. 調査・整理にあたっては、実測図・写真等多数を作成したが、そのすべてを本書に掲載することが不可能であるため、それらの資料は出土遺物とともに辰野町教育委員会に保管しているので、広く活用されたい。

## 発掘調査関係者名簿

### 1. 樋口五反田遺跡発掘調査団

調査団長 友野良一（日本考古学協会会員・宮田村）

調査員 赤羽義洋（辰野町郷土美術館学芸員）

調査補助員 田畑幸雄・赤羽やよい・村上茂子

発掘調査協力者 赤羽信雄・板倉たせ子・植村翠・垣内諭・倉田まき子・倉田守・小松祐二・城倉けさみ・瀬戸貴美雄・茅野安男・中谷あき子・林キヨエ・村上武夫・村山明・矢島郁夫・山崎馨・山崎良之助

### 2. 事務局

教 育 長 小林晃一

社会教育課長 小松弘茂

文 化 係 長 平泉栄一

文 化 係 田畑幸雄・赤羽義洋

# 目 次

序

例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 保護協議の経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 位置と付近の地形・地質	5
第2節 歴史的な環境	7
第Ⅲ章 発掘調査	10
第1節 発掘調査の概要	10
第2節 遺跡の層序	10
第Ⅳ章 遺構と遺物	23
第1節 縄文時代の遺構と遺物	23
1. 縄文時代早期の遺物	23
第2節 弥生時代の遺構と遺物	29
1. 第1号住居址	29
2. 第1号溝状遺構	33
3. 第1号土坑	33
第3節 その他の遺構と遺物	34
1. 第2号溝状遺構	34
2. 木管導水遺構	34
3. その他	37
第Ⅴ章 発掘調査の成果とまとめ	38
註・参考文献	39

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	荒神山のローム層柱状図	5
第3図	辰野町段丘面区分図	6
第4図	周辺遺跡分布図	9
第5図	基本層序図	10
第6図	発掘調査区位置図	11
第7図	グリッド図	13—14
第8図	調査区土層断面図(1)	15—17
第9図	調査区土層断面図(2)	18—20
第10図	調査区遺構全体図	21—22
第11図	縄文時代早期土器拓影図(1)	24
第12図	縄文時代早期土器拓影図(2)	25
第13図	縄文時代石器実測図(1)	26
第14図	縄文時代石器実測図(2)	27
第15図	第1号住居址実測図	30
第16図	第1号住居址出土土器実測図	31
第17図	第1号住居址出土土器拓影図	32
第18図	第1号住居址出土石器実測図	32
第19図	第1号土坑実測図	33
第20図	木管導水遺構実測図	34
第21図	第1号・第2号溝状遺構実測図	35—36
第22図	その他出土遺物実測図	37

## 写真図版目次

- 図版1 遺跡遠景 / 調査区遠景
- 図版2 発掘調査風景（南から） / 発掘調査風景（北から）
- 図版3 土層断面 / 調査区近景
- 図版4 第1号住居址 / 第1号住居址炉 / 第1号住居址炉（炉内埋設土器）
- 図版5 第1号土坑 / 第1号溝状遺構
- 図版6 第1号・第2号溝状遺構 / 第2号溝状遺構
- 図版7 木管導水遺構 / 木管導水遺構断面図
- 図版8 縄文時代早期の土器（表面） / 縄文時代早期の土器（裏面）
- 図版9 縄文時代の石器 / 縄文時代・弥生時代の石器
- 図版10 第1号住居址炉内埋設土器（1） / 第1号住居址炉内埋設土器（2）
- 図版11 第1号住居址出土土器 / 平安時代以降の遺物

# 第 I 章 調査の経緯

## 第 1 節 保護協議の経過

樋口五反田遺跡は、昭和47年から48年にかけて、中央道建設等に伴う発掘調査によって、縄文時代、弥生時代の大規模な集落址であることが判明した遺跡である。

昭和60年9月、辰野町役場において、役場開発関係各課、辰野町教育委員会及び考古学専門研究者友野良一氏の出席により、辰野町埋蔵文化財保護検討会が開かれ、町内の今後の開発計画とそれに伴う埋蔵文化財保護について協議を行ったが、辰野町樋口地区においては今後圃場整備事業、県道与地辰野線整備事業が計画されていることが明らかにされた。

昭和60年12月、辰野町樋口地区の団体営土地改良総合整備事業施工予定区域内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、辰野町役場農政課から辰野町教育委員会へ照会があった。このため教育委員会社会教育課では現地を視察した結果、施工予定区域内には樋口五反田、荒神社欠沢、荒神山おんまわし、窪畑の4遺跡が存在することが判明し、広範囲であることなどから、事前に試掘確認調査が必要であると判断した。昭和61年9月、長野県教育委員会文化課、辰野町役場農政課、辰野町教育委員会及び考古学研究者友野良一氏の4者で保護協議を行い、これら4遺跡の具体的な保護措置については、試掘確認調査後に再協議することとした。なお、昭和62年度施工予定区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しないが、弥生時代水田址の出土の可能性もあるとして、プラント・オパール分析を行うことについて文化課から提示があった。

団体営土地改良総合整備事業については、当該地区が昭和63年度着工の見通しとなったため、辰野町長小沢惣衛の委託を受けて昭和62年4月から辰野町教育委員会が試掘確認調査を実施した。その結果、隣接する緊急地方道整備事業（与地辰野線上伊那郡辰野町下田）予定地内においても弥生時代の遺構等が出土する可能性が高まったため、長野県伊那建設事務所建設課、辰野町役場建設課と協議し、引き続き道路予定地内の試掘確認調査を実施し、弥生時代の溝状遺構及び、縄文時代早期の遺物包含層を確認した。5月、伊那建設事務所建設課、辰野町教育委員会及び考古学研究者友野良一氏の3者で保護協議を行い、道路予定地内の280㎡について発掘調査を実施し、記録保存をはかることとした。6月、伊那建設事務所長伊沢修の委託を受け、辰野町教育委員会が発掘調査を実施した。

(田畑)

## 第2節 発掘調査の経過

### 調査日誌

5月29日(金)～30日(土)

発掘調査に伴う農業用水路のつけ替え及び重機による表土除去。(旧水田〈1〉の耕土まで)

6月1日(日) 表土除去後の調査区内にグリッド設定。全体をジョレンがけし、排土作業。

6月2日(火) グリッドごとに掘り下げを行う。縄文土器等若干出土。

6月3日(水)～5日(金) BF-44グリッド付近から木製立杭数本出土。各グリッド掘り下げ継続して行う。

6月6日(土) 立杭出土地点から南西方向へ埋設された木管遺構出土し、立杭はこれに伴うものと判明。木管付近のグリッドの掘り下げと木管遺構内の排土と清掃、溝状遺構内の掘り下げ。

6月8日(月)～10日(水) 木管出土のBB-42グリッド付近一帯に黒色の落ち込みプランを確認。黒色土内より弥生土器が出土し、弥生時代の遺構と思われる。溝状遺構内の精査。

6月11日(木)～13日(土) 土層用ベルト及び発掘区北西壁に沿って、落ち込み内にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、Ⅴ～Ⅷ層を掘り込んだ弥生時代の住居址と判明し、AY-43、AY-44、BA-44グリッド付近の5m×1.5mの範囲を拡張する。

伊那建設事務所、辰野町役場農政課、同建設課現場を視察。(11日)

6月15日(日)～17日(火) 住居址内の掘り下げ。BF-48グリッド付近に落ち込みを確認し、掘り下げを行うが、底近くで出水し始め作業難航。

6月18日(水)～19日(木) 住居址内の細部調査を行い、柱穴等掘り上げる。BG-43、BG-44、BH-43、BH-44グリッド付近一帯のⅢ～Ⅳ層間に検出されていた鉄分等沈澱の堅い面の精査を行うが、水田面とは思われない。

6月22日(月)～25日(木) 試掘確認調査で縄文時代早期の遺物が出土したBE-45グリッド付近一帯のグリッドを、Ⅴ～Ⅷ層へと掘り下げる。AY-40グリッド内から縄文早期土器尖底部出土。

6月27日(金)～30日(火) 住居址の清掃と写真撮影。溝状遺構は調査区南端部で不明瞭となり、調査区東壁沿いに大形の礫を包含した落ち込みを確認。BC～F列の45～48グリッドの掘り下げ。住居址内炉の精査と炉使用の土器とり上げ。

7月1日(水)～4日(土) 住居址測量終了し、住居址にかかるBA～C列の43～47グリッドの掘り下げを始める。BD-37、BE-38、BF-38付近の落ち込み内の礫の測量ととり上げ。調査区土層断面の測量・記録作業を始める。

- 7月6日(月)～11日(土) AY-37、BA-37付近の落ち込みの精査と礫の測量。B～E列の40～42グリッドの掘り下げを行うが、裏層以下は大形の礫を多量に含んでいる。
- 7月17日(金)～23日(木) 深掘りした地区の精査と土層断面図作成。調査区の全体的な測量等を行う。
- 7月27日(月) 全体的な測量等の確認と器材の撤収を行い、現地での調査を終了。

調査期間が梅雨の時期と重なったため悪天候の日が多く、また地下水位も高く出水の著しい場所もあり、排水ポンプを使用するなどしたが、現場での調査は予定より2週間余り遅れる結果となった。

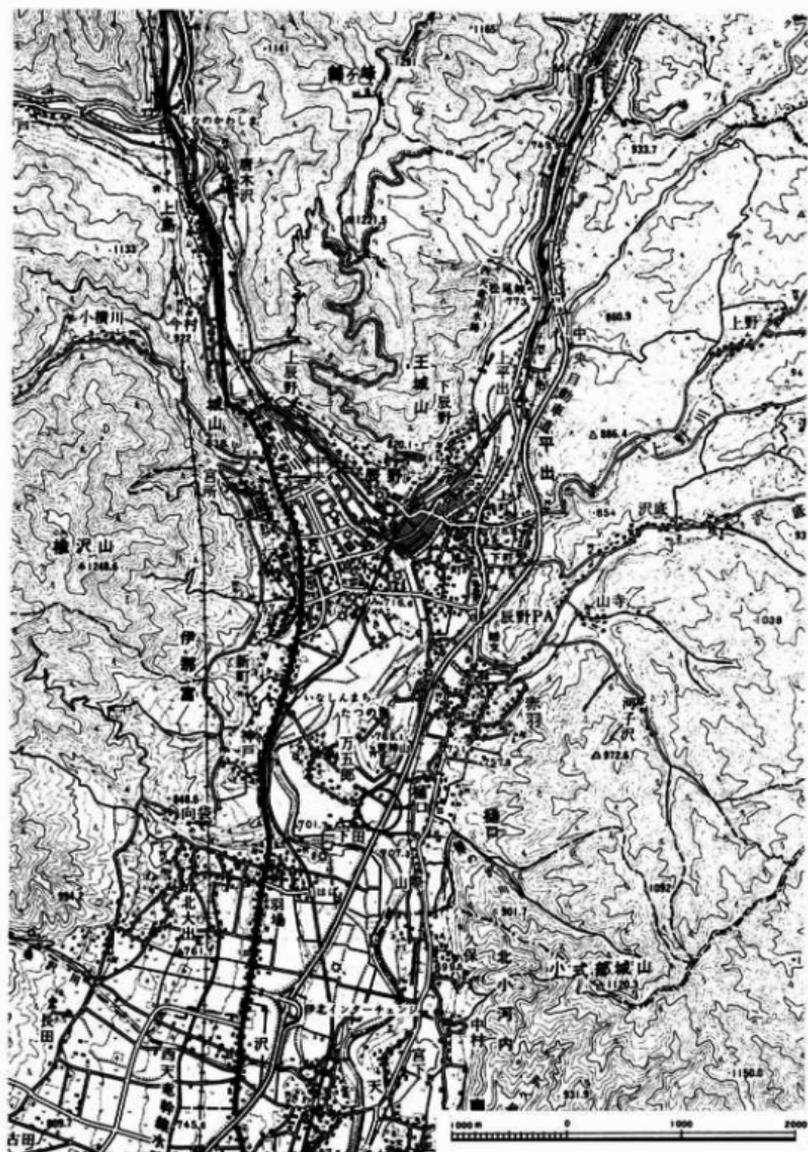
なお、記録や出土遺物等の整理作業と報告書作成は、昭和63年1月から3月まで辰野町郷土美術館及び辰野町教育委員会において実施した。(田畑)



調査開始式



調査風景



第1圖 遺跡位置圖(○印)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 位置と付近の地形・地質

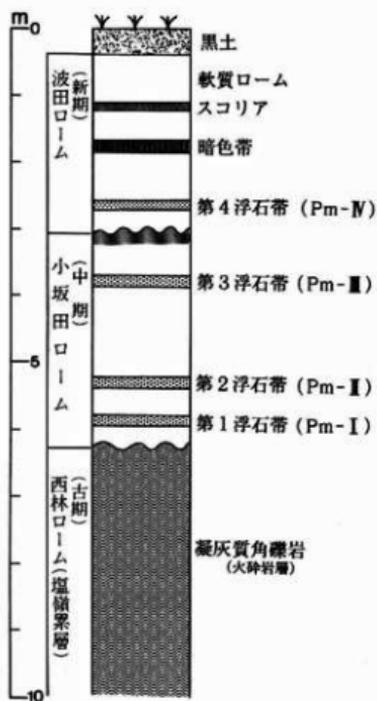
位置 樋口五反田遺跡は、長野県上伊那郡辰野町樋口地区に所在する。町平坦部ほぼ中央に位置する荒神山の西を大きく湾曲して南流する天竜川の左岸段丘上に立地し、東方の山麓より流れる板橋川と矢沢川によって東西を開析された岬状の台地50,000㎡を占める広大な遺跡である。隣接する荒神社矢沢遺跡をへだてて北方へ280mの段丘上には樋口内城遺跡があり、矢沢原扇状地の遺跡群へと続いている。また、天竜川をこえて南方には、天竜川右岸の広大な扇状地とみごとな段丘が遠望できる。

今回調査を実施した箇所は、昭和47年・48年に調査が行われた地区から北西へ続く一段底位の段丘面で、板橋川に面しており、現在大半は水田として利用されている。発掘区の標高は706m前後で、天竜川との比高は9～10mである。

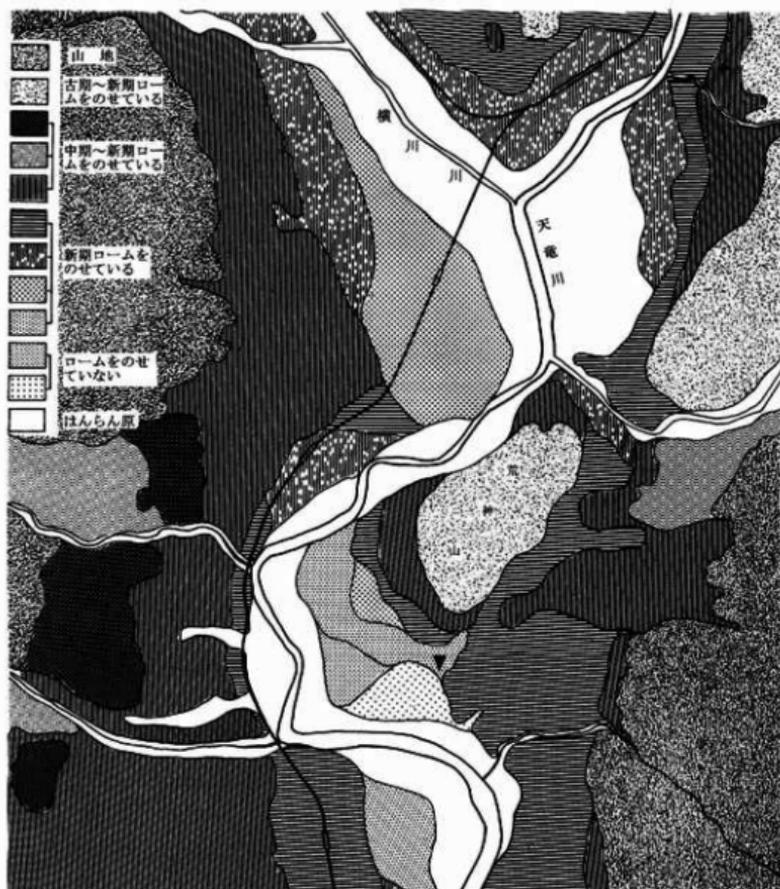
地形・地質 荒神山とその周辺は、小規模ながらいくつもの河岸段丘が形成されているところで、中でも荒神山は上伊那北部の高位段丘荒神山面の模式地としてよく知られ、荒神山火砕岩層（凝灰角礫岩層）を覆って古期・中期・新期の各風成ローム層をのせている段丘である。（註1）五反田遺跡の立地する段丘面は、KS-2木下段丘2と呼ばれるものに相当し、新期ロームを少しのせていると思われる。これより一段低い今回の累道部分の段丘面は、第2節でも述べるが、風成ロームを殆どのせておらず、KS-3木下段丘3または下田a面とするもの（註2）に相当すると考えられ、同位面にある荒神山おんまわし遺跡の試掘確認調査でもローム層は確認されず、河川堆積物の上に黒土層がのっていることが認められた。また、この面より更に下位にもう一面の段丘面が存在し、下田b面と呼ばれている。（註3）

なお、AT火山灰については、伊那市伊那東部中学校露頭及び飯田市石子原遺跡で確認されている（註4）が、辰野町においては未確認である。

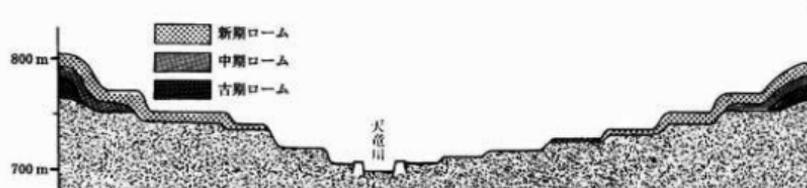
（赤羽）



第2図 荒神山のローム層  
〔原図：清水1962(註1)〕



▼印は五反田遺跡



〔東西断面模式図〕

第3図 辰野町段丘面区分図

## 第2節 歴史的な環境

辰野町樋口地区は町内でも遺跡の密集するところで、樋口五反田、樋口内城両遺跡をはじめ、荒神山おんまわし、矢沢原遺跡群など、規模の大きい遺跡が多い。これらの遺跡については第4図のとおりである。樋口内城、同五反田両遺跡とも縄文時代の町内の代表的な集落址であるが、弥生時代の集落址が4カ所も近接することが、この地区の大きな特徴である。

**樋口五反田遺跡** 昭和47年・48年と中央道建設及び園場整備事業に先立ち発掘調査が行われ、縄文時代では中期住居址8基、後期前半加曾利B式土器と土偶、それに晩期後半水式土器を伴う配石址16基等が出土し、配石址内からは火熱を受けた鹿角片が出土している。また、弥生時代後期の遺構として24基の住居址のほか、2基の方形周溝墓が発見されており、時間差はあるものの、この時期の集落の一部と墓址が発掘された。(註5) またC16号住居址からは0.3ℓほどの炭化米が検出され、石庵丁の出土とともに、米作りと密接に関わっていた集落であったことが明らかとなった。さらに、D2号住居址からは県下でも出土例が少ない鉄斧(鍛造)が発見されており、このあたり一帯の有力なムラであったことを想起させる。一方C4号、C16号住居址の炉内からは、火熱をうけたシカ、イノシシ、カモシカ、シバイヌの骨片が出土し、弥生時代にもシカ、イノシシの食用はもちろんだが、カモシカ、シバイヌをも食したらしい?意外な事実が認められた。(註6) そのほか古墳時代の住居址1基が出土しているが、町道新橋線北側の荒神社矢沢遺跡の南寄り3基の縄文時代中期の住居址は、位置的、地形的にもまた時的にも五反田遺跡の一部と考えられる。なお、水田中から縄文時代中期新道式土器が採集されている。また、この一帯の地名は江戸時代元禄3年(1690年)の検地帳に、「五反田」、「八た田」、「村前」、「山きわ」、「矢沢」、「窪畑」などが見え、農地の開発は古くから行われていたらしく、今回の調査でも新旧3枚の水田面が確認された。

**荒神社矢沢遺跡** 樋口五反田遺跡と樋口内城遺跡の間にあり、中央道建設のさい発掘調査され、縄文時代中期の4期の住居址の出土をみたが、前述のとおりこの内3基は樋口五反田遺跡に含めるのが適当で、縄文時代中期括沓式期の1基がこの遺跡の遺構であろう。なお、調査時の所見として、遺跡内の土層は灰褐色粘質土が厚く堆積していたり、腐植質の粘質土があったりして、湿地帯の特徴をよく示していたという興味ある報告がある。(註7) また、付近から田舟の一部と思われる木片も採集されており、かなり古い時期から水田が営まれていた可能性がある。(註8)

**樋口内城遺跡** 矢沢原の扉状地から西へ続く舌状の段丘上にあり、中央道建設、園場整備事業に先立って発掘調査が行われ、縄文時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が多量に出土した。(註9) 縄文時代中期の住居址57基、同土坑85基、弥生時代の住居址66基が発掘され、これらの時代の代表的な集落としてその構造が明らかとなった。特に弥生時代5号住居址出土の炭化ムギの存在は、樋口五反田遺跡の炭化米と対照的である。また、古墳時代の住居址2基、平安時代の住居址8基が認められた。

一方、中世末期の城館跡としての遺構・遺物も確認され、樋口次郎兼光の居館跡という伝承を

立証することはできなかったが、この地域の歴史的研究に新知見をもたらした。

荒神山おんまわし遺跡 板橋川をはきんで五反田遺跡の西側段丘上に広がる大きな遺跡で、平安時代末期の土師器坏数点が採集されており（註10）、圃場整備事業に伴う62年の試掘確認調査では、同じく平安時代の土師器、須恵器と、縄文時代早期の土器が出土している。

屋敷前遺跡 樋之沢川と五反田遺跡の間の段丘上にあり、縄文時代中期の土偶片などが採集されている。（註11）

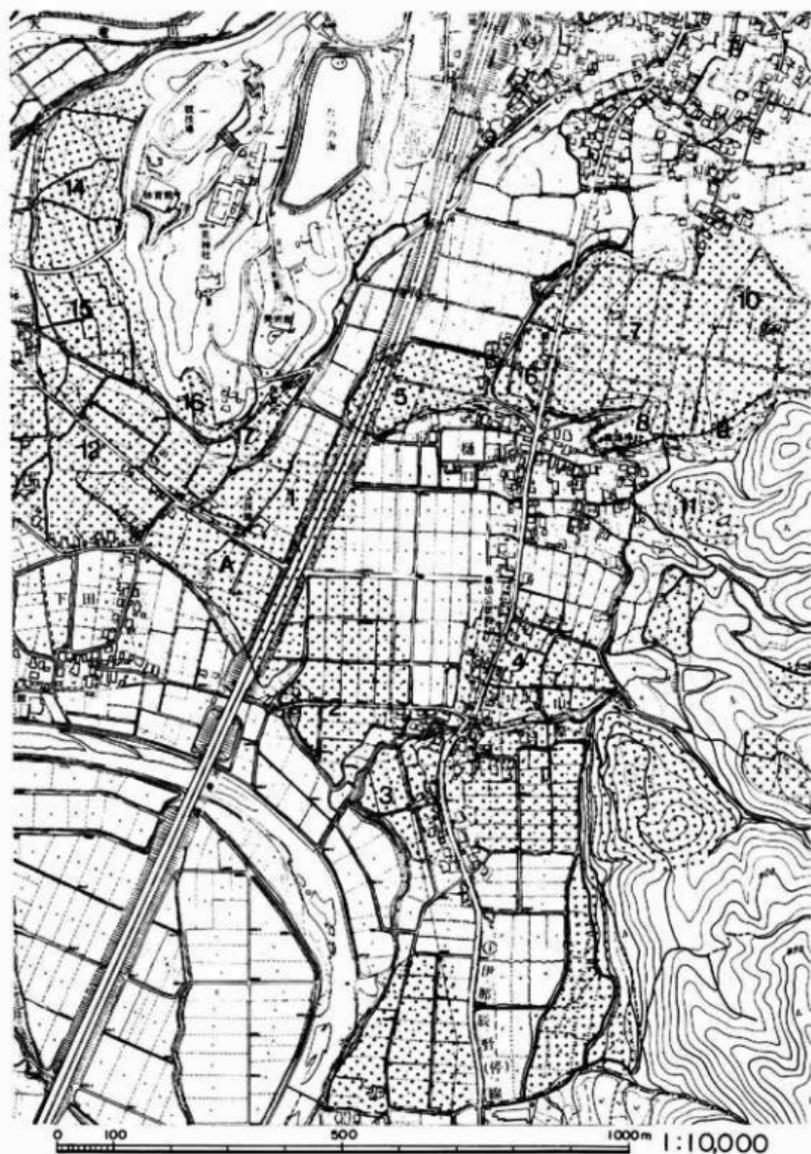
八反田遺跡 樋之沢川左岸の段丘上にあり、圃場整備事業中に弥生時代後期の埋甕炉多数が発見され、大規模な集落址であったことが確認された。（註12）

矢沢原遺跡群 南を矢沢川、北を板橋川、二洞川によって挟まれた25haに及ぶ広大な扇状地に富士浅間、矢沢原、矢沢原西、宮の窪、千鹿頭白山の5遺跡が密集している。縄文、弥生、古墳奈良・平安の各時代と、中世以降の遺物など多数が採集されている。

（赤羽）

No	遺跡名	縄文時代					弥生時代	古墳時代	奈良平安	中世以降
		早期	前期	中期	後期	晩期				
1	荒神社矢沢			◎					○	
2	屋敷前			○						
3	八反田					◎				
4	山際			○					○	
5	樋口内城	○	○	◎	○		◎	◎	◎	◎
6	矢沢原西			○						
7	矢沢原			○			○	○		
8	千鹿頭白山			○?			○		○	
9	宮の窪	○	○	○			○		○	○
10	富士浅間			○?			○	○	○	
11	姫御前口			○			○		○	
12	荒神山おんまわし	○							○	
13	万五郎								○	
14	荒神山西	○	○	○	○?		○	○	○	○
15	荒神山南麓			○						
16	荒神山南			◎						
17	窪畑	○?		○	○?				○	

周辺遺跡一覧表（○印は遺物出土、◎は遺構出土を示す）



第4図 周辺遺跡分布図(A:樋口五反田遺跡)

## 第Ⅲ章 発掘調査

### 第1節 調査の方法と調査結果の概要

今回の発掘調査地点は、昭和47年・48年の調査区より一段低い段丘面であり、また現状が殆ど水田として利用されていたため、事前に試掘確認調査を実施し、土層や地下の遺構・遺物の状態を把握することとした。町道新橋線上の基点を使用し、これを基準に対象地全面に10m四方の基準方眼を設定し、原則としてこの1基準方眼内に1カ所のグリッド(2m×2m)を設けた。グリッドは基点から磁北方向を数字、東西方向をアルファベットで表現した。(第7図)

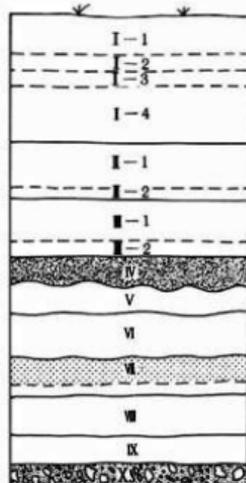
試掘確認調査の結果、弥生時代の遺物包含層と溝状の遺構及び縄文時代早期の遺物包含層を確認したので、伊那建設事務所、長野県教育委員会文化課と協議の結果、発掘調査による保護措置をとることとし、遺構等の認められた280㎡について全面発掘調査を行った。

その結果、弥生時代後期竪穴住居址1基、同溝状遺構、土坑各1基、時代不明溝状遺構1基、明治～大正時代の木管導水遺構1基が出土し、遺物としては、縄文時代早期押型文土器、同条痕文土器・石器、弥生時代後期の土器、平安時代の土師器・須恵器、それに赤羽焼等が発掘された。出土遺物総数は約1200点である。

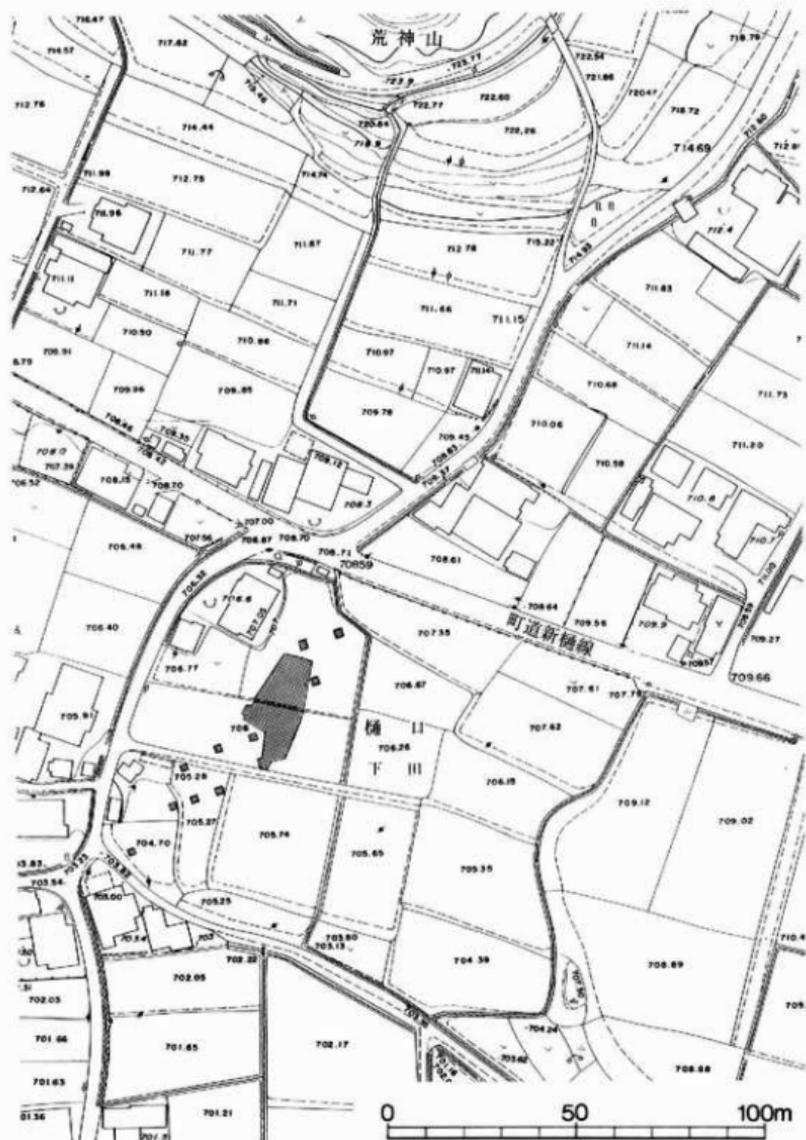
### 第2節 遺跡の層序

今回の調査区は、昭和47年・48年の調査箇所からやや離れており、また西に板橋川が流れていることなどから、試掘確認調査時からできる限り土層の観察と遺物包含層の把握につとめ、発掘調査区各壁面の断面測量を行い記録した。(第8・9図)その結果、I層からX層まで分層することができたが、水田面が場所により上下に3枚あるなど、地点によりかなり土層の状態は異っており、複雑な様相を示していた。なお、風成ロームの堆積は認められず、水成ロームと思われるものがわずかに堆積していた。基本層序は次のとおりである。

- I層 I-1: 現水田耕土 I-2: 現水田耕土(酸化鉄、マンガン沈澱著しく、かたい) I-3: 現水田基盤  
I-4: 現水田造成時の埋土
- II層 II-1: 旧水田(1)耕土 II-2: 旧水田(1)基盤
- III層 III-1: 旧水田(2)耕土 III-2: 旧水田(2)基盤
- IV層 黑色土 木炭含み、土師器、須恵器、弥生土器を包含。



第5図 基本層序図



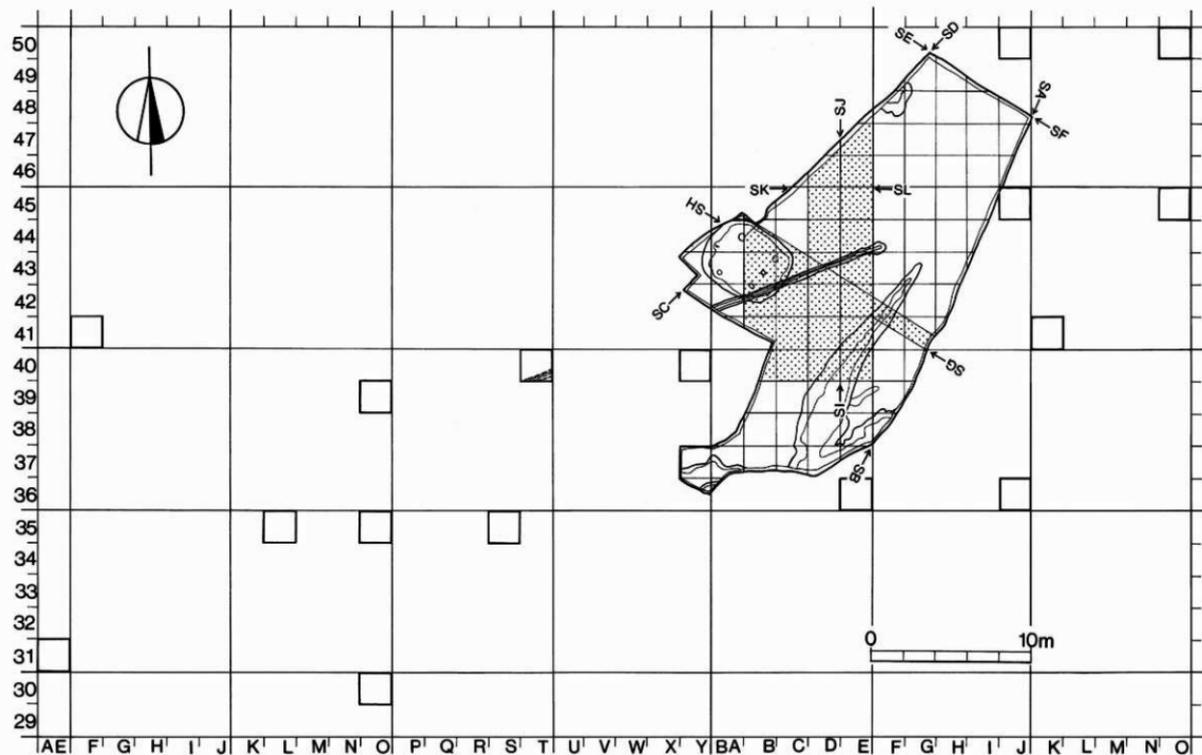
第6図 発掘調査区位置図(スクリーントーンが調査区)

弥生時代の遺構はこの層の上面付近から落ち込む。

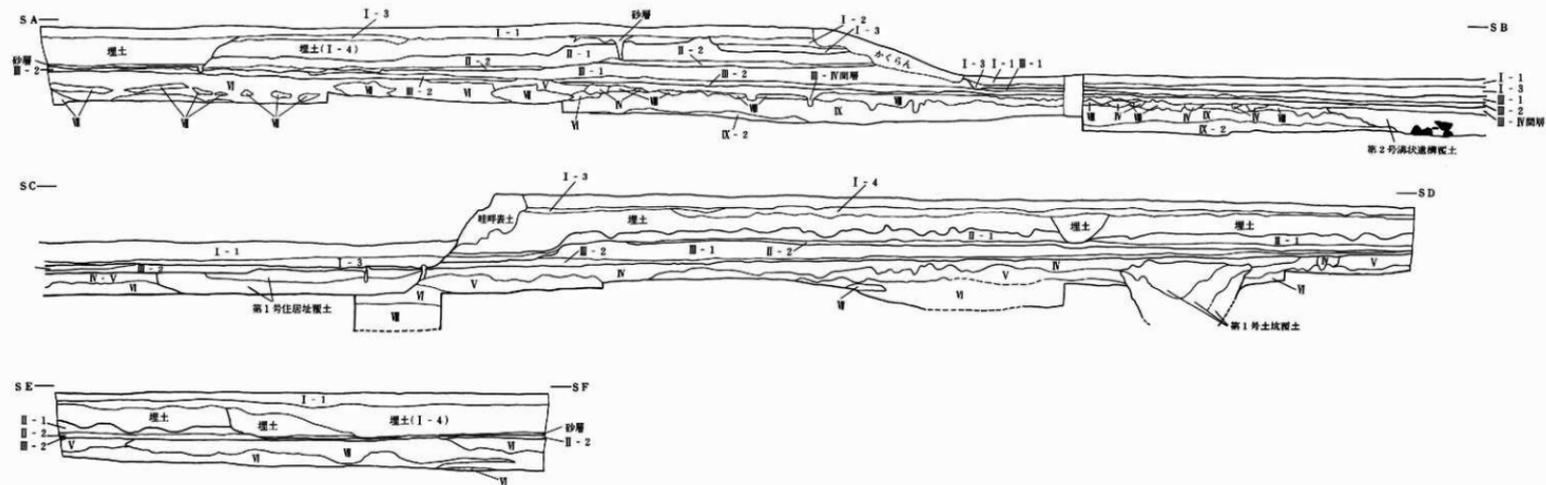
- V層 黒色土と灰褐色土のまじり 遺物の包含は少ない。
- VI層 灰褐色土（砂質性） 下部に縄文時代早期条痕土器包含。
- VII層 砂礫土 径2～5mmくらいの砂により構成されるが、VI層内に包含されることが多く、VI層とは時間的に同時か、或いは近接しており、旧板橋川によって運ばれた可能性がある。縄文時代早期条痕土器、同押型土器を含む。
- VIII層 黒褐色土 やや粘質、上部で早期土器少量出土。
- IX層 灰褐色粘質土 灰色粘質土と水成ロームが混合して堆積したものの。遺物は包含されない。  
IX-2層：灰褐色粘質土に砂粒がまじる。
- X層 灰褐色粘質土に多量の礫を包含 礫は河川堆積物か。IX層からX層にかけては場所により湧水が顕著。

なお、III層とIV層間には、発掘区中央東寄りに、下面に赤褐色の鉄分の非常にかたい沈着面をもつ層が存在し、便宜的にIII-IV間層としたが、古い水田面とは思わず、長期間滞水した結果形成されたものと考えた。

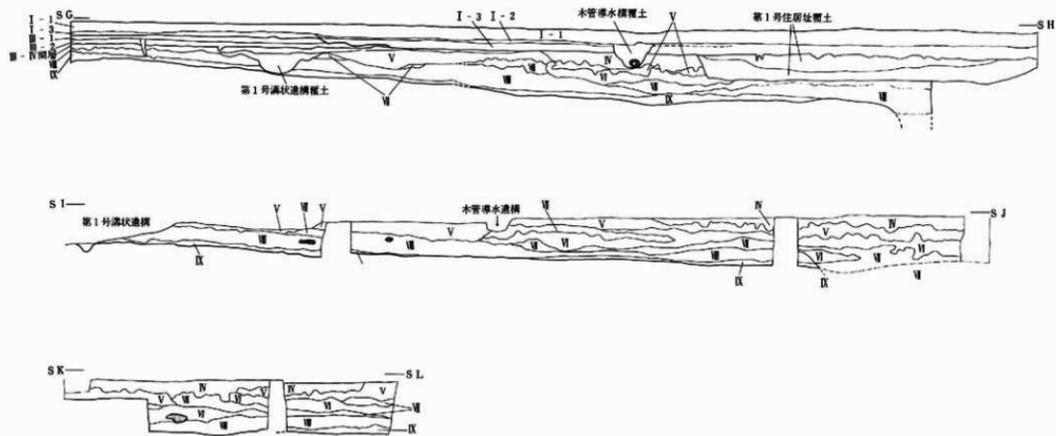
土層断面からこの発掘区内の旧地形を復原してみると、VIII層上面において発掘区北西壁に平行に、北東から北西の方向へ1～1.5mの巾で北西へ傾斜した地形があったことがわかり、出土土器から考えて縄文時代早期中葉の時期には、現在の板橋川の東縁がここを通過していたのではないかと思われる。その後弥生時代後期までの間に、この川の上流部にあった縄文時代早期後半の遺物包含層が浸食され、遺物を含んだVI層、VII層が短時間の内に堆積したのであろう。板橋川はやや流路を西へずらすか、巾をせばめ、V層、IV層が堆積して平坦化したところへ弥生時代後期の住居が構築されたと考えられる。その後、平安時代ころの滞水を経て、旧水田（3）が開かれ、続いて旧水田（2）への改良後現水田に至っているが、その間の現水田築成後に発掘区域内北寄りの一部が池として利用され、再び埋め戻されたらしい。従って、後述する木管導水遺構とこの池とは一体のものであった可能性がある。なお、旧水田（1）と旧水田（2）の築成年代については、その基盤等から遺物の出土がはっきりしないが、上下の土層などから平安時代以降江戸時代末期ころの間と推定されるが、現水田一面のみの箇所についても、結果的に一面だけ残ってきたのであって、それまでの間に削土等による改良を行っている可能性も十分ある。（赤羽）



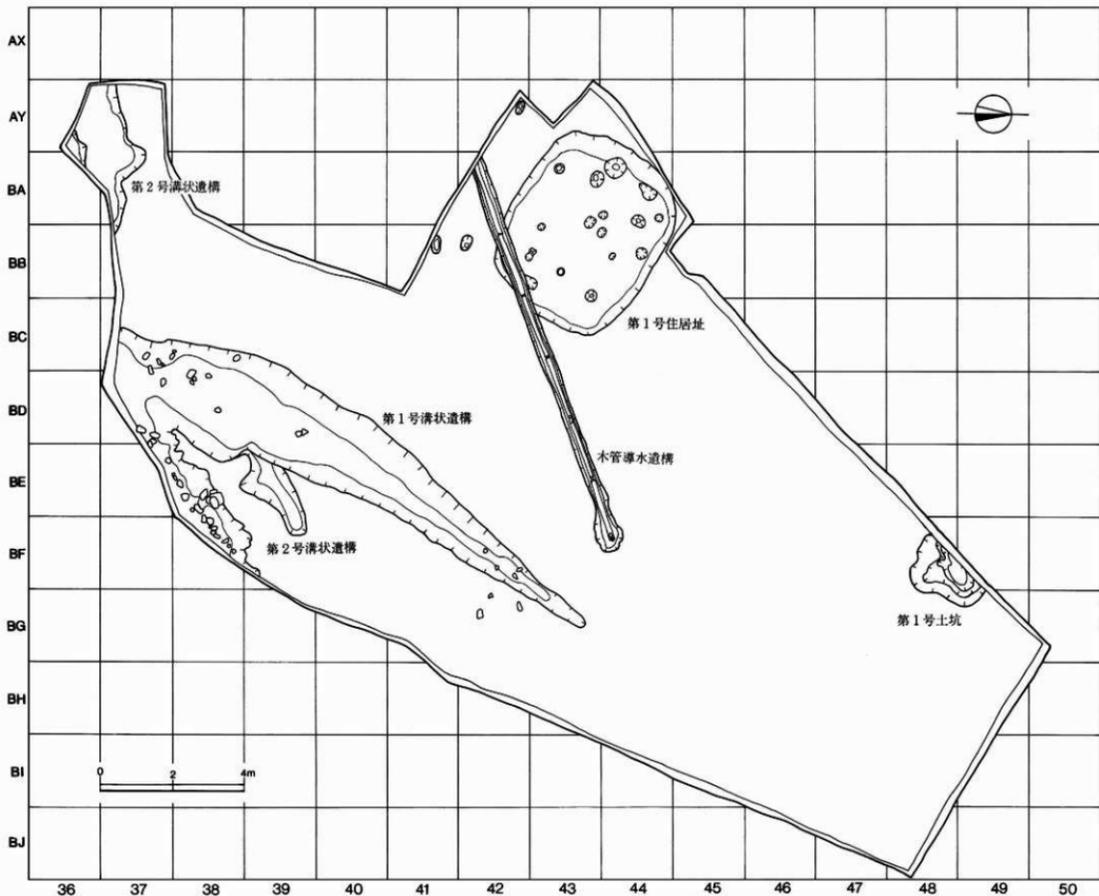
第7図 グリッド図（調査準備に伴う試掘グリッドを含む。調査区内スクリーントーンは深掘りしたグリッド、矢印は土層断面位置）



第8图 調査区土层断面图(1)



第9図 調査区土層断面図(2)



第10図 調査区遺構全体図

## 第四章 遺構と遺物

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

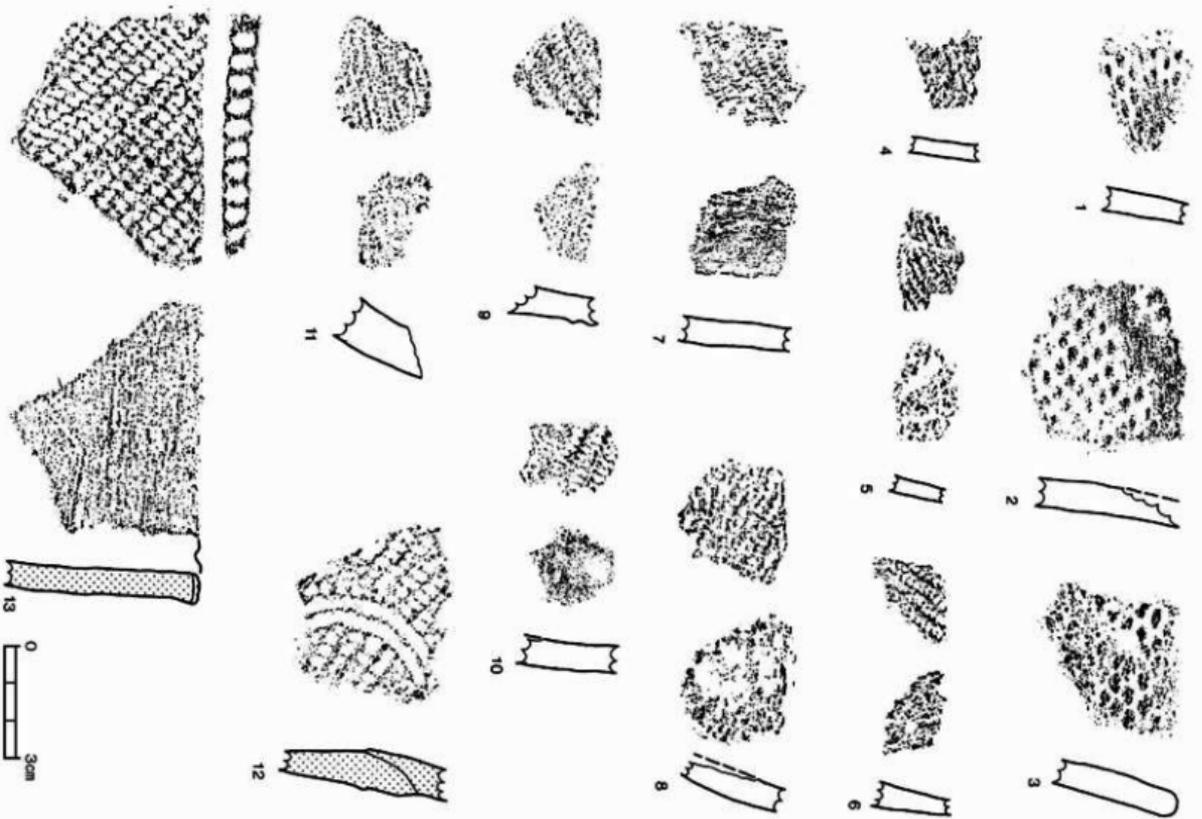
#### 1. 縄文時代早期の遺物

土器 今回の調査では、縄文時代早期の遺構は確認されなかったが、早期中葉から末葉の土器、石器が出土した。出土状態については、第三章第2節でも述べたように、殆どはⅤ層、Ⅵ層に包含されており、一部Ⅶ層上部に含まれるものがあったが、Ⅴ層、Ⅵ層内出土の遺物は、新橋線北の包含層が削られて運ばれてきた可能性が高いものである。

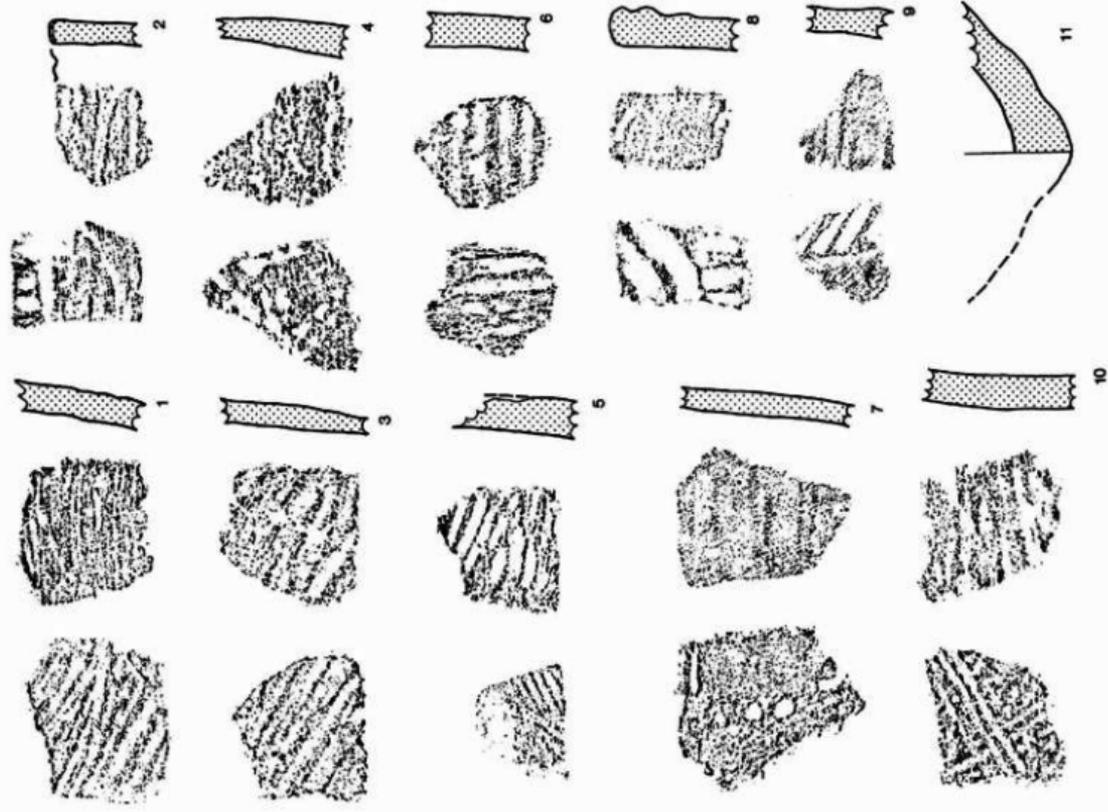
第11図1～4は押型文土器で、1、2はⅤ層から、3はⅥ層、4は第1号住居址壁面から出土している。1～3は楕円押型文土器で、4は格子目文がわずかに観察できる。1～3は胎土に砂粒を多く含み、3の口縁部破片は脆弱で表面が剥落し易い。1の内面はていねいに仕上げられ、黒色化している。4は厚さ4mmと薄いが、焼きはしっかりしている。5～11は外面のみ縄文施文の行われた土器で、胎土中に繊維を含んでいる。5、6、8、9はⅣ層から、7、10、11はⅤ層からそれぞれ出土した。いずれも内面に縄文、条痕等の施文はなく、胎土には砂粒多く含むが、焼き上がりはしっかりしている。縄文原体は5～10のいずれも2段R-Lを使用しており、9・10は回転せずに側面を押しつけた可能性もあるかもしれない。11の原体ははっきり観察できない。12・13は太い縄文原体2段R-Lによって施文された土器で、2点とも繊維を多く含んでいる。12には縄文施文後に平行する2条の凹線が引かれており、胎土には大粒の砂粒が含まれている。内面は磨耗が著しい。13はやや薄手の土器で、石英、長石、雲母等多く含む、内面には擦痕状の調整痕がこのころ。口唇部上面には連続して押捺が加えられている。

第12図1～10はいずれも条痕文のある土器で、胎土中に繊維を多量に含み、11は条痕施文はないが尖底部の破片である。1～3、5、6は内外両面に条痕が施され、7～9も内面には条痕が観察できる。1は内面と外面の施文が異っている。2は口唇上に指頭状施文による連続圧痕がある。4には竹管による連続刺突が幾何学的区画を構成するもので、やや大粒の砂粒と繊維を多く含むが、内面の条痕は不鮮明である。7にはわずかな高さの微隆起線上に円形の押圧状の刺突が加えられ(円形竹管ではない)、太い沈線の施文もある。8も同じく微隆起線が施される。10は縄文施文の上に条線が直交する破片で、繊維を多く含む。11の底部破片は多量の繊維と砂粒を含むが、条痕はみられない。

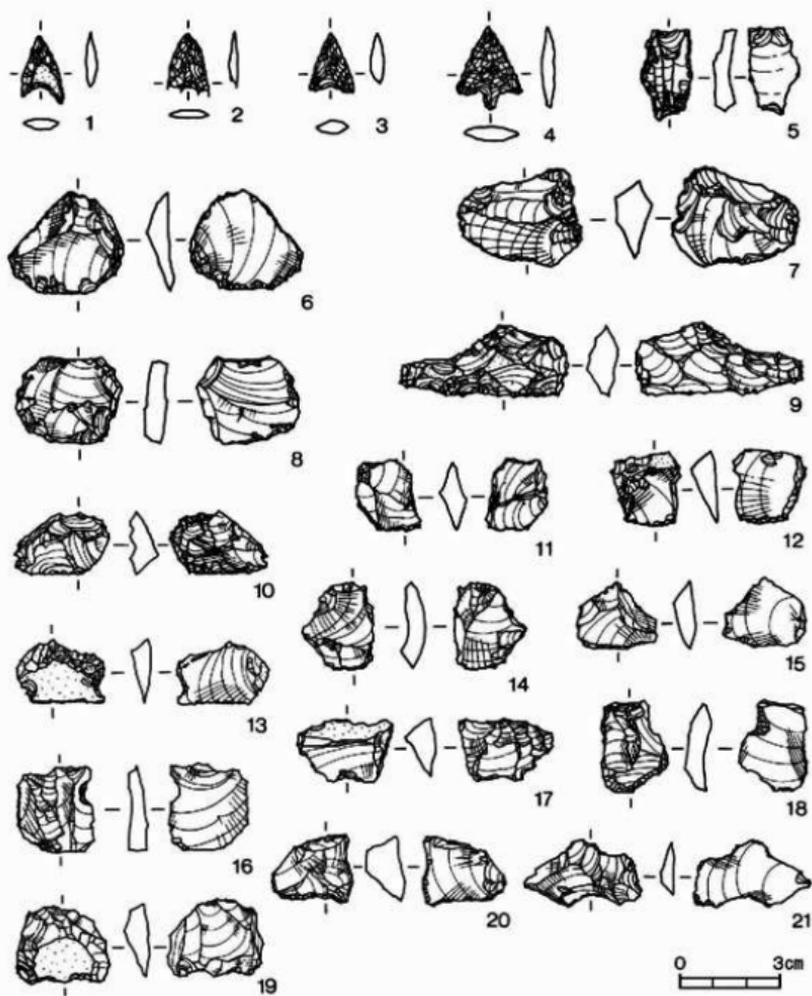
石器 第13図1～4は石鏃で、1～3は凹基無茎鏃、4は平基有茎鏃である。いずれも黒曜石を使用している。(以下小形の石器はすべて黒曜石) 1は縄文時代早期の長脚鏃の一種に近いものとも思われる。また、基部の形状などから、2は同じく早期の獣形鏃と呼ばれるものに似ている。4は縄文時代後・晩期の石鏃であろう。5～21は定形化した石器とは思われないもので、スクレーパー状のもの(6～9)と、縁辺部に刃部状の小剝離のある剝片(10～21)などである。16～



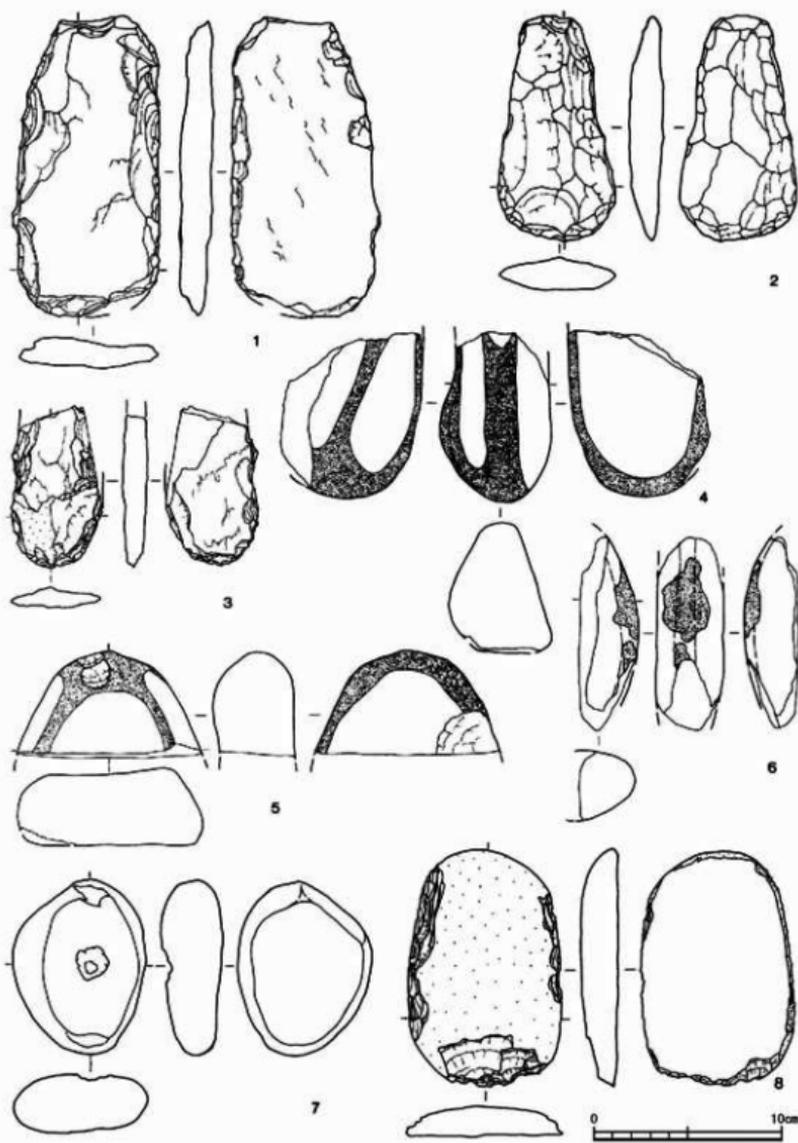
第 11 図 縄文時代早期の土器 (1)



第12図 縄文時代早期の土器(2)



第13图 縄文時代石器実測図(1)



第14图 縄文時代石器実測图(2)

18、21は挿入部を作り出している。

第14図は大形の石器で、1～3は打製石斧、4～6は礫縁辺部などに軽い敲打痕状のものが見られる。特に4は「特殊磨石」と呼ばれてきた石器で、早期に属するものと思われる。5の先端部には敲打痕がある。7は凹石で、片面のみ凹みが認められた。8は楕円状の礫の両長辺と短辺に剝離痕があるが、水平に半截されているが、或いは石器製作途上で割れてしまった可能性もある。岩質は、1～3は粘板岩で、1と2は泥岩に近く、軟質で濃いねずみ色をしている。4～7はいずれも砂岩の転石を使用している。8も粘板岩のひとつと思われるが、やや緑色を呈する。以上の石器は早期以外のものも含まれるが、便宜的にここに一括して記述した。

## 2. その他の遺物

図示しなかったが、その他土器として、中期勝坂期1点、同曾利期1点、後期加曾利B期1点いずれも細片が出土しているが、遺構等は調査区から離れたところにあると思われる。（赤羽）

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### 1. 第1号住居址

**調査経過** 調査区北西のBB-42グリッド付近の木管導水遺構を調査中に、付近一帯に黒色の落ち込みプランが認められ、黒色土内に弥生土器片を包含し、弥生時代の遺構と思われたため、SG-SH土層断面観察用ベルト及び調査区北西壁に沿って、落ち込み内にサブトレンチを設定して掘り下げたところ、住居址の床面及び柱穴が確認され、弥生時代の住居址と判明した。層位的にはV～VI層を掘り込んで構築されており、IV層付近がこの住居址の時期の生活面であったと思われる。調査区北西壁にかかるBA-44グリッドなど約4グリッド分8mを拡張し、住居址全体の平面プランを確認し、重複する木管導水遺構調査後住居址内の掘り下げを行った。

覆土は大きく2層に分層できたが、1・2層のちがいは明瞭ではなく単一層の状態に近いものであった。また、覆土中からは弥生土器の細片が主な出土遺物で、量的には少なかった。

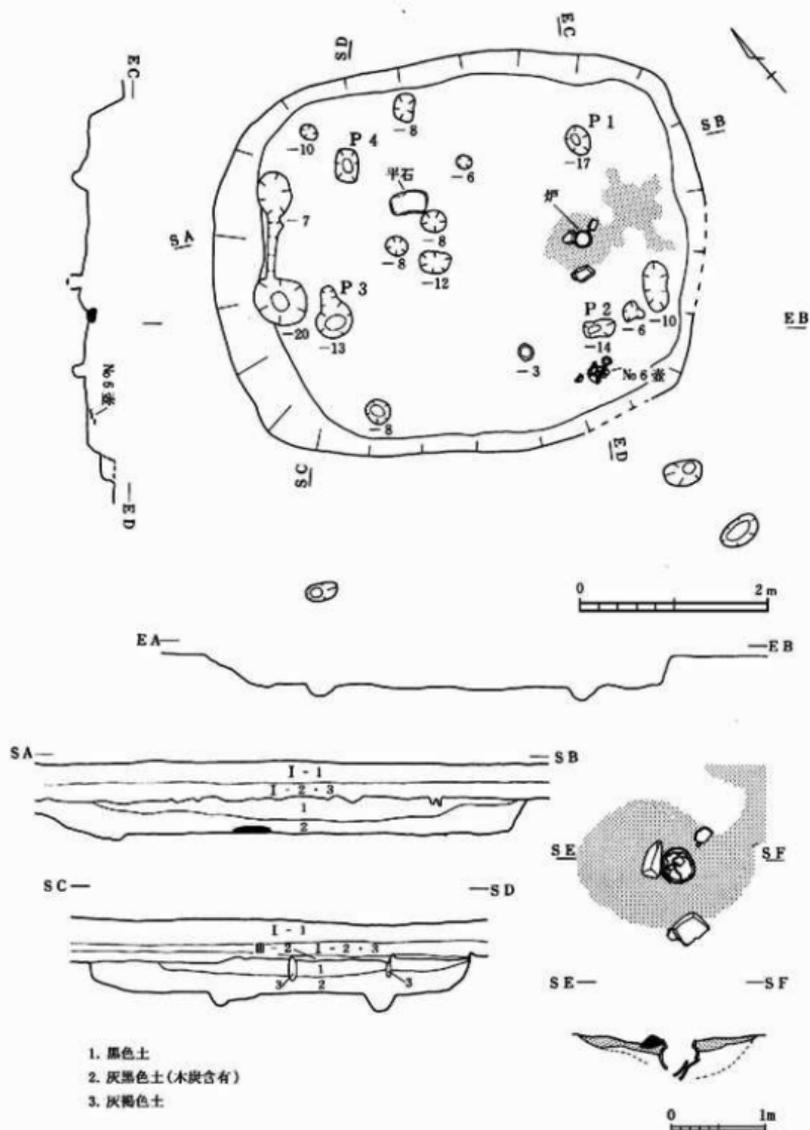
**遺構** 掘り上がった住居址は、上部が水田造成の際削平されているものの比較的残存状態は良く、南東コーナー付近で、東から西へ木管導水遺構がその一部を破壊している。平面形は、長辺、短辺とも脹みのある隅丸長方形に近く、内部には支柱穴と思われるP1～P4が掘られていたが、半割材を使用した掘り方の形状(註13)かどうかについては確認できなかった。P1-P2間に炉があることから、北西側が出入口部と思われ、北西の壁は傾斜が緩くならから、壁下には支柱穴P3、P4に平行して浅いピット2カ所があり、これをつなぐ周溝状の溝が設けられている。出入口部施設のひとつと思われる。そのほか住居址中央部やや北西寄りには、この時期の住居址に特徴的なピット3カ所があるが、深さ8～12cmといずれも浅い。またこの近くの床面直上には平らな自然礫が置かれており、出入口部に続く竪穴住居内の土間兼仕事場を思わせる。

炉はP1-P2間の床面を掘り下げて埋燵炉が設けられている。埋設されていた土器は第16図7、8の2個体で、7の壺の破片が下部に逆位に、8の甕の胴部片が上部に正位に設置されていた。埋設土器に近接して、炉縁石様の礫がある。なお、土器埋設のための掘り方については、断面からははっきり確認できなかったが、ほぼ埋設土器の大きさの掘り方であろうと思われる。また、焼土、灰、木炭等の混じった層が、埋燵炉周辺にやや厚く、その東側の床面直上に薄く不規則に分布している。

一方、P2と壁の間からは第16図6の壺が、床面よりやや浮いた状態であったがまとまって出土している。恐らく住居廃絶後の竪穴内部への流入土上へ棚などから落下したものである。

なお、床面の状態は、出入口付近は軟らかく、壁も含めてやや不明瞭であったが、その他の床面は比較的堅く明瞭であった。出入口部を除いて、壁際には周溝らしい施設は認められなかった。

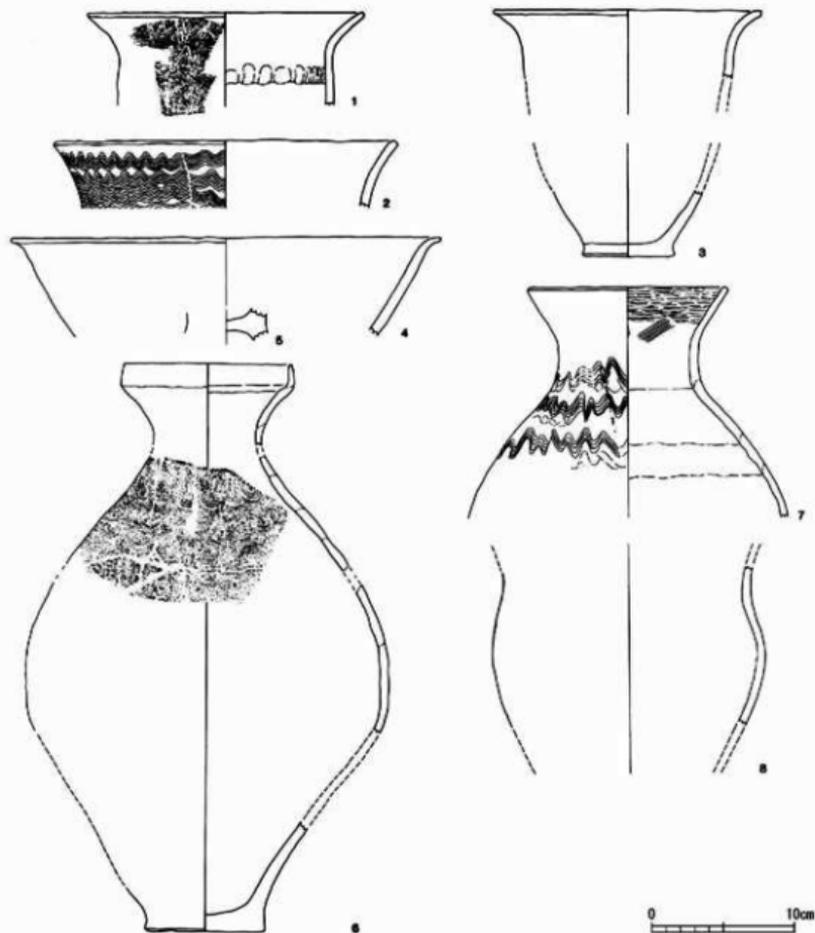
**遺物** 住居址内からは、図示可能な第16図、17図の土器と、第18図2の石器などが出土している。第16図1～3及び8は甕で、1、2の口縁部付近には櫛描波状文が施文されている。1、3は口縁部がやや強く外反し、口径が最大径となる形と思われ、2はゆるやかに外反する口縁部をもち、



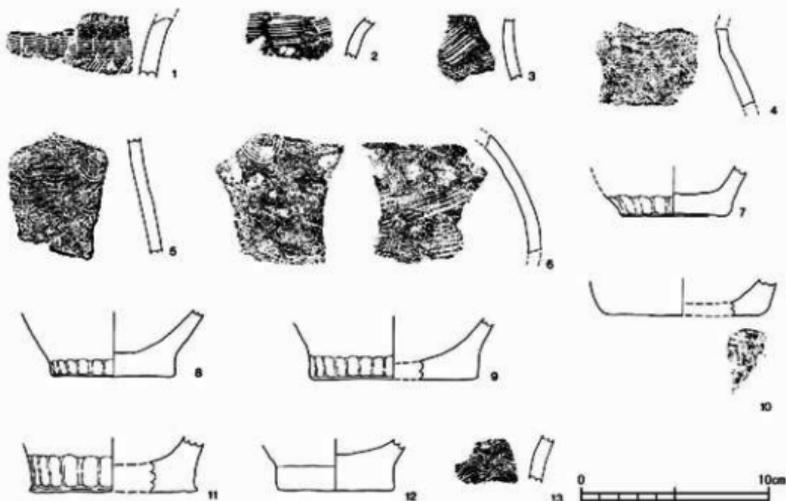
第 15 图 第 1 号住居址实测图

口径と胴部径がほぼ等しくなる器形であろう。8の甕は炉内埋設の胴部だけの土器で、内外とも器面は荒れていて不明瞭だが、外面にはハケによる整形痕が、内面にはヘラによる整形痕が観察できる。岡谷市橋原遺跡の所見（註14）からすれば、1と3は中型甕ということになると思われる。

壺としては6と7があり、6は受口口縁をもつ「受口壺」（註15）で、最大径は胴部中央部にあ



第16図 第1号住居址出土土器(1)



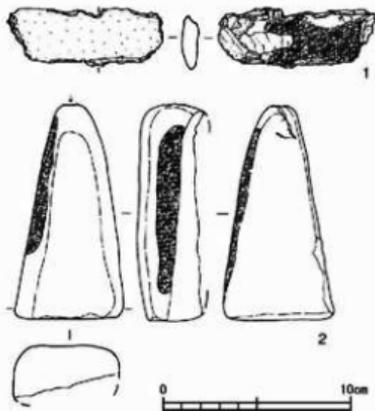
第17図 第1号住居址出土土器(2)

り、口縁部径は小さく、受口部はL字状に立ち上がる。頸部付近には横走する櫛描波状文が3段確認できる。全体が赤褐色で、胎土に砂粒を含み、器面は荒れている。7は単純口縁の甕で、頸部直下に3段の櫛描波状文が施文され、口縁内側には横方向のヘラ整形痕と斜方向のハケ整形痕が認められる。胎土に砂粒を含むが、器面はあまり荒れていない。

4は復原口径30cm程になるとされる高頸部部の破片で、5の頸部片と同一個体であろう。胎土に砂粒目立ち、赤色塗彩は全くされていない。

その他この住居址内からは、第17図1～11の土器片が出土しており、櫛描の短線文、簾状文が施文されている破片が見られる。10の底部片には網代痕がある。図版11-1右上は、弥生土器の破片を用いた円板状の遺物で、出土例は少ない。

石器として、第18図2の磨痕と打痕のある礫のほか、図示しなかったが、ほぼ全面に剝離痕のある径10cm程の球形状の安山岩も出土している。1は住居址東のBD-43内IV層から出土し、石庵丁の未製品かと思われ、穿孔に失敗している。



第18図 弥生時代石器実測図

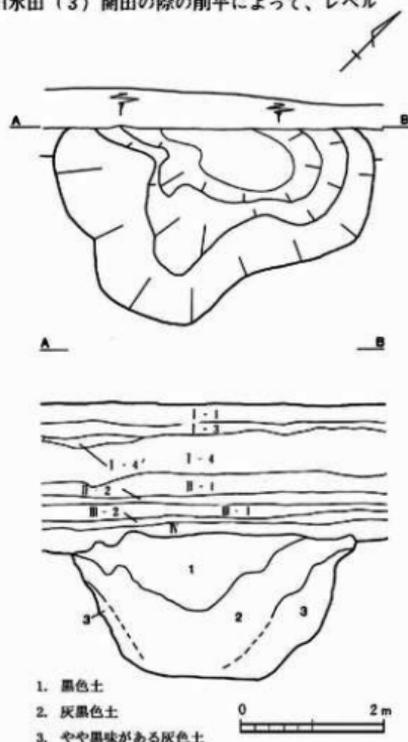
## 2. 第1号溝状遺構

**調査経過** 試掘確認調査の際、BE-40グリッド内において黒色土の落ち込みと弥生土器片の出土が認められたため、西へ拡張し、落ち込み内を掘り下げたところ溝状の遺構であることが判明した。雨天後水が漬くことが多かったため、自然の小河川かとも思われたが、壁、底部とも明瞭で整っていたことから全面調査を行った結果、北東から南西方向へ直線状に延びる溝状遺構が出土した。

**遺構** 層位的にはV層以下を掘り込んで造られており、IV層が溝内覆土の最上部にのっている。BG-43付近から直線状に南西へ延び、BD-37付近で第2号溝状遺構と一体となっており、覆土等の状態からは、両遺構の新旧は確認できなかった。

溝の幅はBG-43付近で最も狭く35cm程で、BD-38・39付近で最大となり3mをこす。深さは25cm～30cmだが、底部は北東から南西方向へ傾斜している。従って、BG-43付近から北東方向へもこの溝は延びていた可能性があり、恐らく旧水田(3)開田の際の削平によって、レベルの高い部分が失われたものと思われる。溝底部近くの覆土8、9層が砂粒を含むことなどを考慮すれば、何らかの排水路的な性格の遺構と考えられる。なお、溝の底面、壁面とも堅く明瞭であったが、第2号溝状遺構近くは不明瞭であった。また、BE-39内の小さな溝は、この遺構には付随しないものと判断した。

**遺物** 第17図13は櫛播液状文のある破片で、溝底面から出土、同じく12はBE-40内の溝覆土から出土した。第22図1は、やはりBD-37内の溝覆土から出土した小型～中型くらいの甕である。



第19図 第1号土坑

## 3. 第1号土坑

BF-48グリッド付近の調査区壁際の遺構で、V層以下を掘り込んでいる。平面形は不規則な形で、壁もやや不明瞭で、底近くでは湧水が多く、調査は難航した。土坑内からの出土遺物は、時代不明土器細片2点であったが、IV層に近似した覆土1層の上面にIV層がのっていたため、弥生時代の遺構として扱った。

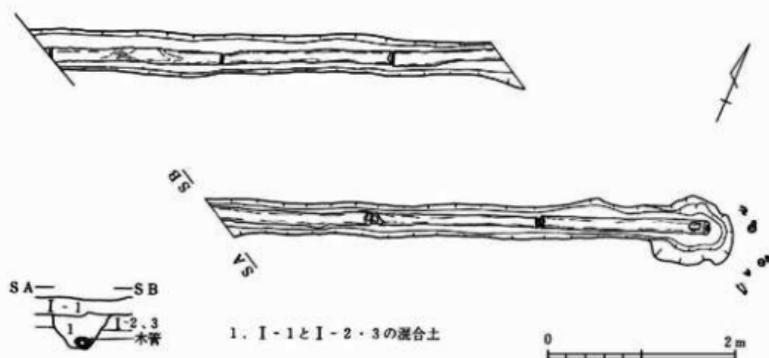
### 第3節 その他の遺構と遺物

#### 1. 第2号溝状遺構

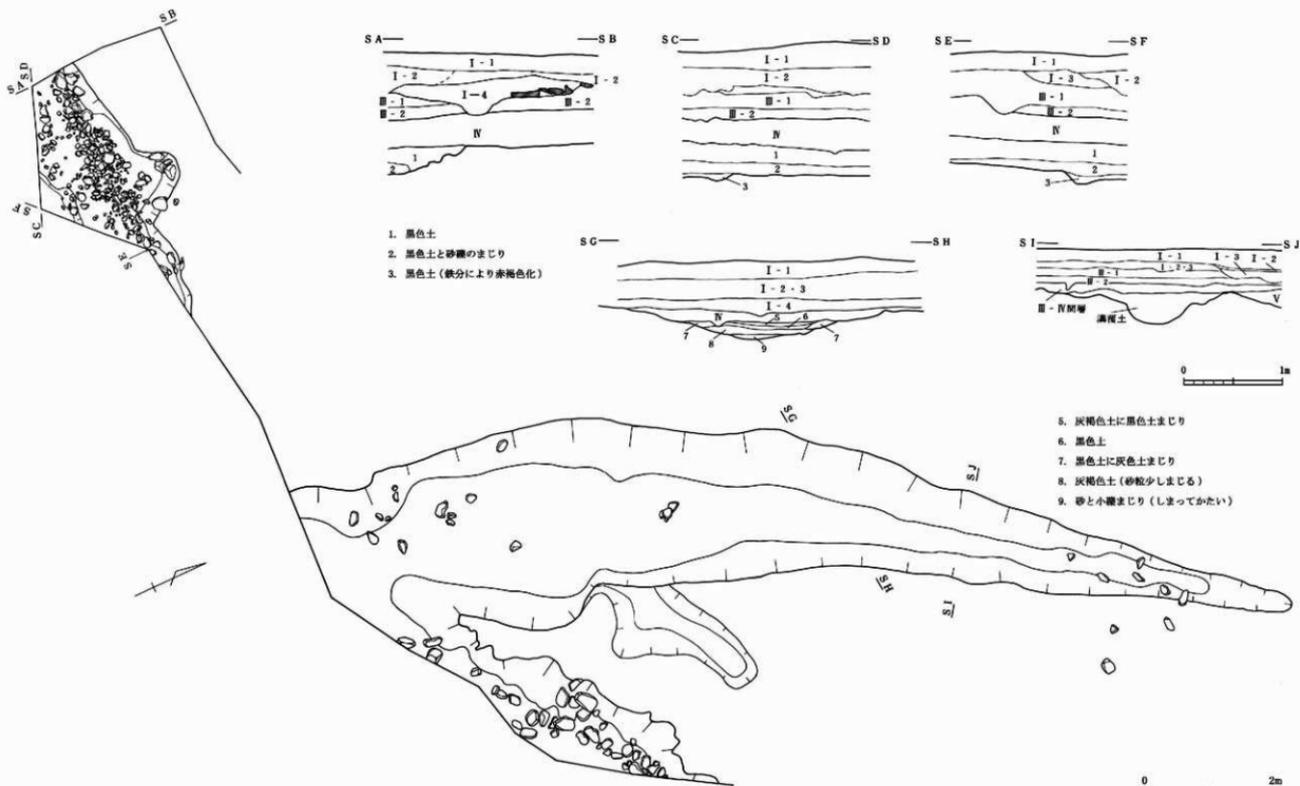
**調査経過** 第1号溝状遺構の平面プランを確認する際、BC-37、BD-37、BE-37、BE-38、BF-38グリッドにおいて黒色土の落ち込みが見られ、遺構であるのか確認するため内部を掘り下げたところ、調査区南東壁に沿って延びることがわかった。また、試掘調査を行ったAY-37グリッド内下部において落ち込みらしい部分が存在し、湧水のため調査を中断していたが、このグリッドを南側と東側へ拡張し、落ち込み内を掘り下げた結果、南側へ傾斜する遺構の壁らしい面が認められた。調査区南東壁際の前者を第2号溝状遺構、後者を第3号溝状遺構としたが、調査後の整理の段階では両者同一の遺構と判断し、合わせて第2号溝状遺構と呼称することとした。

**遺構** 調査区南東壁際の付近は溝の底、壁とも堅く明瞭だが、壁は細かく屈曲している。覆土下部には比較的大形の礫が散在していた。底面は平坦で、砂などの存在は認められなかった。また、AY-37付近では、壁は2段になって南へ傾斜しており、部分的に堅い面があるが、中小の礫が一面に露出している。この礫は自然である可能性もあり、壁面から多少浮いたやや大形の礫が遺構に関連するものとも思われる。なお、BE-36グリッド内では、AY-37の溝壁面と似た中小礫まじりのフラットな面が出土しており、これがこの遺構と一連のものだとすると、溝と言うよりかなり面的な広がりをもつと考えられる。

**遺物** この遺構と関連するであろう遺物で図示可能なものは、第22図5と6である。5はBF-38内覆土上部より出土した土師器、6はBE-36の礫まじりの面から出土した須恵器坏である。これらの遺物から、この第2号溝状遺構は、少なくとも平安時代には存在していたと考えられる。



第21図 木管導水遺構実測図



第20図 第1号溝状遺構・第2号溝状遺構尖頭図

## 2. 木管導水遺構

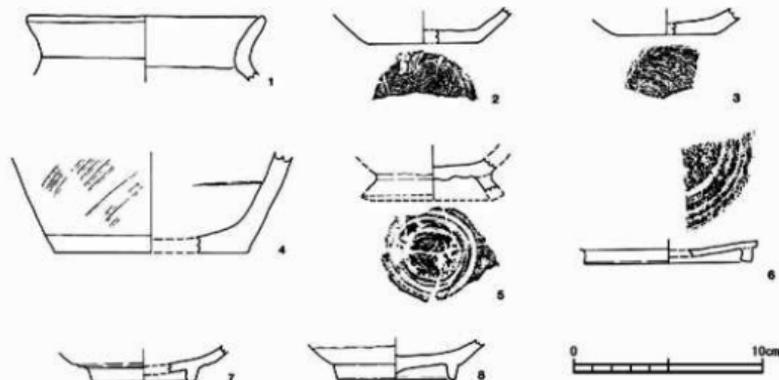
調査区中央部のBF-44グリッド掘り下げ中に立杭が出土し、本調査着手直後であったため弥生時代の木柵かと思われたが、周辺調査の結果、ここから南西方向へ一直線に延びる木管を発見した。

BF-44南西コーナー付近に70cm×80cm程の土坑を掘り、そこから南西へ幅30cm～40cmの溝を設けて、この中へ径12cm～15cm、長さ170cm～180cmの木管を埋設している。木管は調査区内で7本が出土したが、試掘調査時にAT-40グリッドでも断面を確認しており、同じく試掘調査時の所見としてAL-35グリッドにおいて池らしきものがあつたらしいことがわかっていることから、この池に導水していたとすれば、恐らく30～35本くらいの木管を埋設していたものと思われる。また、調査区断面SA-SB、SC-SD、SE-SFにおいて、最上層の水田を一時池として利用していた土層が認められることから、調査区北半部に存在した池から取水し、木管を通してAL-35付近の池へ水を流していたものと考えられる。なお、遺物の出土はなかったが、大正10年前後までこの付近に製糸関係の施設があつたということで、そのころのものと思われる。

## 3. その他

調査区中央部東寄りには、下面に鉄分などが沈着した赤褐色の堅い面をもつ層がⅢ層とⅣ層との間に存在していた。当初古い水田址かとも思われたが、畦畔等も認められず、平安時代の土師器片などが出土したことから、そのころ長期間滞水した結果形成されたものと判断した。

その他の遺物として、第22図2は須恵器杯、3は土師器黒色土器の杯、4は須恵器甕の底部片である。7は近世の鉄軸片、8は白磁様の破片かと思われる。なお、図示できなかったがこのほかに、灰釉陶器、古瀬戸灰釉、近世以降の染付、それに明治時代以降の赤羽焼などの破片が出土している。(赤羽)



第22図 その他出土遺物実測図

## 第V章 発掘調査の成果とまとめ

樋口五反田遺跡は、今から16年前の昭和47年に中央道建設による初めての発掘調査が行われて以来、今回の県道新設に伴う発掘調査が第3次の調査ということになる。第1次調査以来、五反田遺跡は炭化米を出土した弥生時代の集落址として広く知られてきたが、今回の調査区では、弥生時代の水田址等その生産にかかわる遺構が出土するのではないかと考えられていた。しかし、結果的に弥生時代の遺構としては、住居址1基と溝状遺構1基の出土があり、この遺跡をめぐる弥生時代の状況はより複雑になったと言わざるを得ない。

第1号住居址から出土した土器は、編年的には座光寺原式の時期と考えられるものだが、今回の調査地区内には他に住居址がなく、第1次、第2次調査地区の集落に含まれるものとして扱っているのかどうか、西側へ続く荒神山おんまわし遺跡内に別の弥生時代集落があり、その一部であるのか、今の段階では判断は難しい。けれどもこの遺跡の北に位置する樋口内城遺跡や、同じく東方樋之沢川左岸にある八反田遺跡など、この付近一帯の弥生時代集落の編年の位置や、相互の関係をとらえる上で重要な資料を提供したことはたしかである。なお、今回の調査地区内では、赤色塗彩の土器片は出土していない。

弥生時代の遺構としては他に第1号溝状遺構があり、当初環濠の一部かとも思われたが、溝の断面などからも環濠とは考えにくいものであった。この遺跡の北、樋口内城遺跡との間には前述したように、かつて大湿地帯があったことが知られており、樋口五反田、樋口内城の両集落に付随する水田地帯もその辺に想定できそうで、この溝はそこからの排水路的な意味をもっていたのではないかと。あるいは、この調査地区一帯は地下水位の高いところであることから、住居址に対する排水施設とも思われるが、それらについては、今後の検討課題としたい。

次に、縄文時代早期の遺物として、押型土器、条痕土器などが出土したが、これらはかつての板橋川が運んだVI層、VII層に含まれており、恐らく新橋線北側付近一帯のいずれかにこの時期の遺構等が埋蔵されていることを示している。従って、今回の調査地区内の土層が非常に複雑であったことも考えると、今後付近一帯の開発に当たっては、これらの点に留意して慎重に進める必要がある。

そのほか、思いがけず明治～大正時代ころの水管導水遺構の出土をみたが、今回は記録等の上から十分検討することができなかったが、これなどは近代産業考古学にも貴重な資料を提供することとなる。

最後に、今回の発掘調査にあたりご指導を賜った長野県教育委員会文化課の方々をはじめ、終始ご協力をいただいた伊那建設事務所、辰野町役場建設課、同農政課、それに町議会議員宮沢幸彦氏ほか地元の皆様、また土器復原にお手数を頼した福沢幸一氏に厚く御礼申し上げます。この報告書が、今後の調査・研究と、遺跡の保護に生かされれば幸いです。

## 註

- 註1 上伊那誌編纂会編 1962(昭37) 『長野県上伊那誌』 第一巻 自然篇  
天竜川上流域地質図編集委員会編 1984(昭59) 『天竜川上流域地質解説書』
- 註2 竹淵修二 1980(昭55) 「上伊那北部の河岸段丘の面区分および発達史」 『上伊那教育会郷土館部研究紀要』 第1集  
竹淵修二 1981(昭56) 同第2集  
竹淵修二 1982(昭57) 同第3集
- 註3 註2に同じ
- 註4 註1『天竜川上流域地質解説書』
- 註5 長野県教育委員会 1973(昭48) 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その1—(昭和47年度)』  
辰野町教育委員会 1974(昭49) 『樋口五反田遺跡緊急発掘調査報告書』
- 註6 註5及び  
市沢英利 1973(昭48) 「樋口五反田遺跡出土炭化米について」 『伊那路』 17巻3号  
赤羽義洋 1981(昭56) 「弥生時代の鉄斧—辰野町樋口五反田遺跡出土」 『伊那路』 25巻6号  
長野県史刊行会 1983(昭58) 『長野県史 考古資料編』 全1巻(3) 主要遺跡(中・南信)
- 註7 長野県教育委員会 1974(昭49) 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—上伊那郡辰野町その2—(昭和48年度)』
- 註8 根橋康文 1981(昭56) 「樋口出土の田舟」 『郷土』 第2号
- 註9 註7に同じ
- 註10 辰野中学校郷土室所蔵遺物
- 註11 辰野町樋口 堀内康義氏採集遺物
- 註12 註11に同じ
- 註13 宮田村教育委員会 1976(昭51) 『姫宮』  
岡谷市教育委員会 1981(昭56) 『橋原遺跡』
- 註14 註13『橋原遺跡』
- 註15 市沢英利 1986(昭61) 「飯田・下伊那地方の座光寺原・中島式土器の変遷過程—受口壺の型式分けとそれに組成する土器群の分析から」 『長野県考古学会誌』 51号

## 参 考 文 献

- 益富壽之助 1955(昭30) 『原色岩石図鑑』

- 岡本 勇 1962 (昭37) 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」『横須賀市立博物館研究報告』  
(人文科学) 6
- 神村 透 1966 (昭41) 「中部高地」『日本の考古学』Ⅱ
- 長野県教育委員会編 1968 (昭43) 『地下に発見された更埴市桑里遺構の研究』
- 西村正衛 1973 (昭48) 「茨城県潮来町狭間貝塚」『早稲田大学学術研究』22号
- 大槌町教育委員会 1974 (昭49) 『崎山弁天遺跡』
- 日立市教育委員会 1975 (昭50) 『日立市速下遺跡調査報告書』
- 市川市教育委員会 1975 (昭50) 『美濃輪台遺跡—B地点—』
- 笹沢 浩 1977 (昭52) 「弥生土器—中部・中部高地3」『考古学ジャーナル』No134  
◇ 1978 (昭53) 「中部高地型撈摺文の系譜」『中部高地の考古学』
- 宮沢恒之 1978 (昭53) 「伊那谷における弥生集落の展開—諏光寺原式期を中心として」  
『中部高地の考古学』
- 菅原康夫 1980 (昭55) 「弥生系農業における水利施設の意義と展開(上)」『古代学研究』第92号
- 飯田市教育委員会 1986 (昭61) 『恒川遺跡群』
- 金関 怒・佐原 真編 1988 (昭63) 『弥生文化の研究』2 生業
- 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会編 1988 (昭63) 『弥生時代の環濠集落をめぐる諸  
問題』Ⅲ

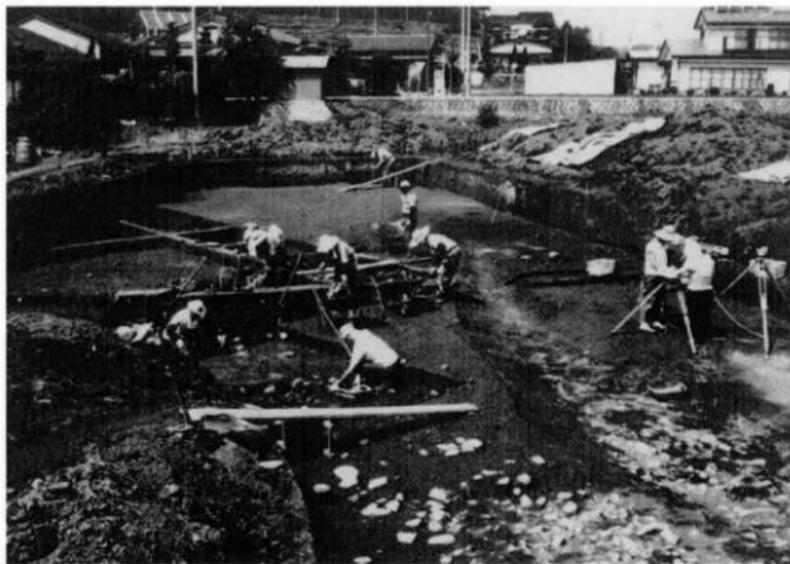
## 写真図版



1. 遺跡遠景（南方から．手前は天竜川、後方は荒神山）



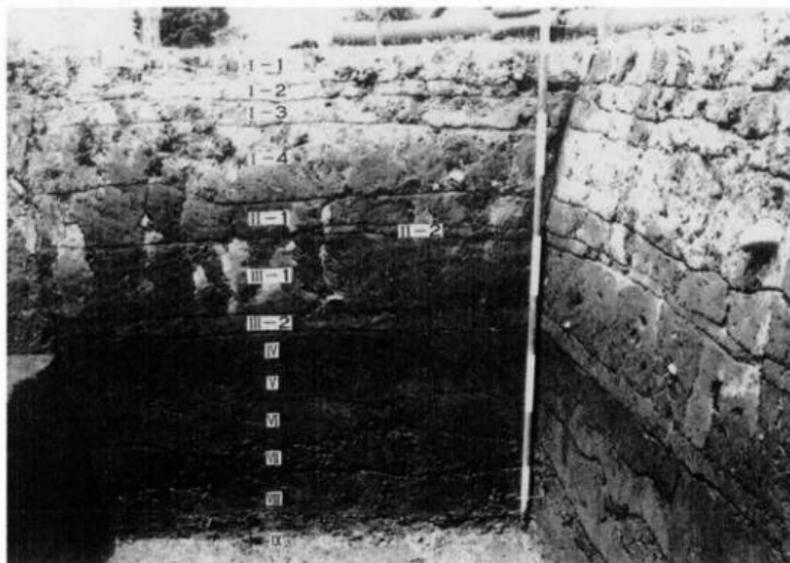
2. 調査区遠景（東方から）



1. 発掘調査風景(南から)



2. 発掘調査風景(北から)



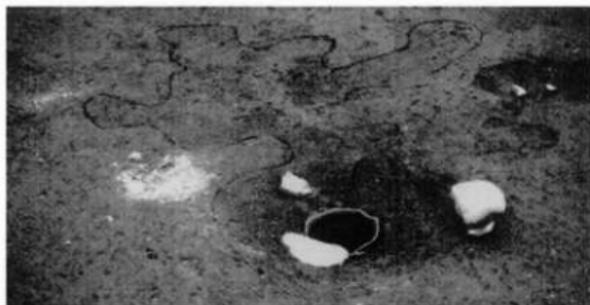
1. 土層断面 (AE-45 試掘坑)



2. 調査区近景 (北から)



1. 第 1 号住居址



2. 第 1 号住居址炉  
(ラインは木炭等の分布範囲)



3. 第 1 号住居址炉  
(炉内埋設土器の状況)



1. 第 1 号土坑



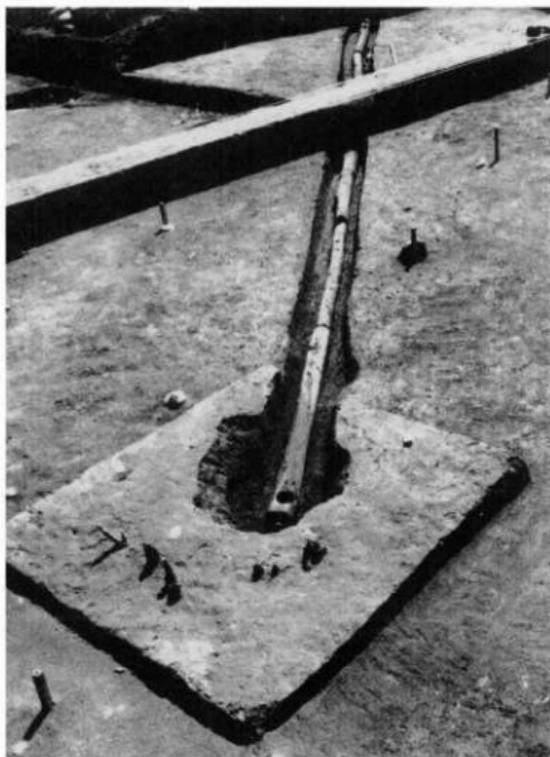
2. 第 1 号溝状遺構



1. 第 1 号・第 2 号溝状遺構



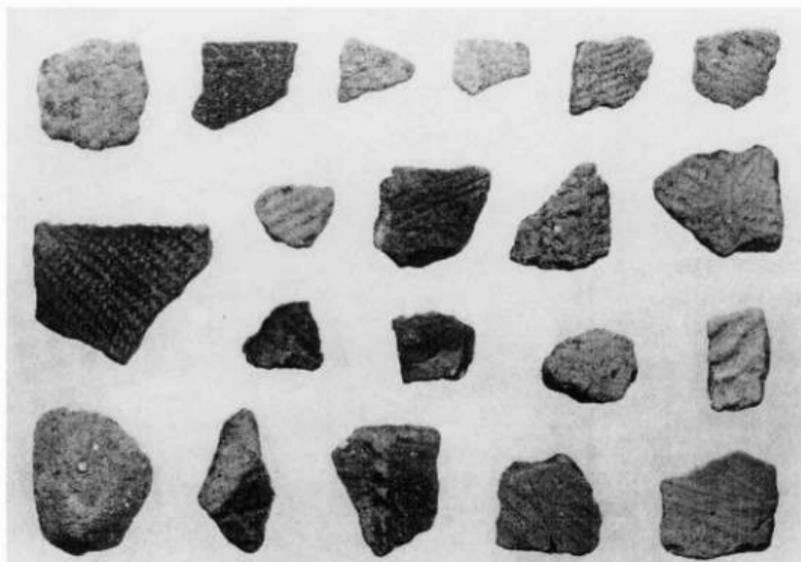
2. 第 2 号溝状遺構



1. 木管導水遺構



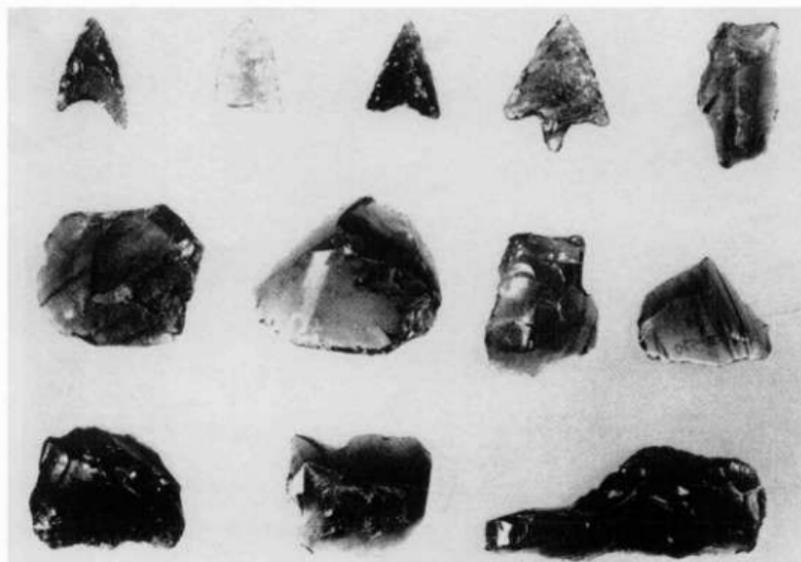
2. 木管導水遺構断面



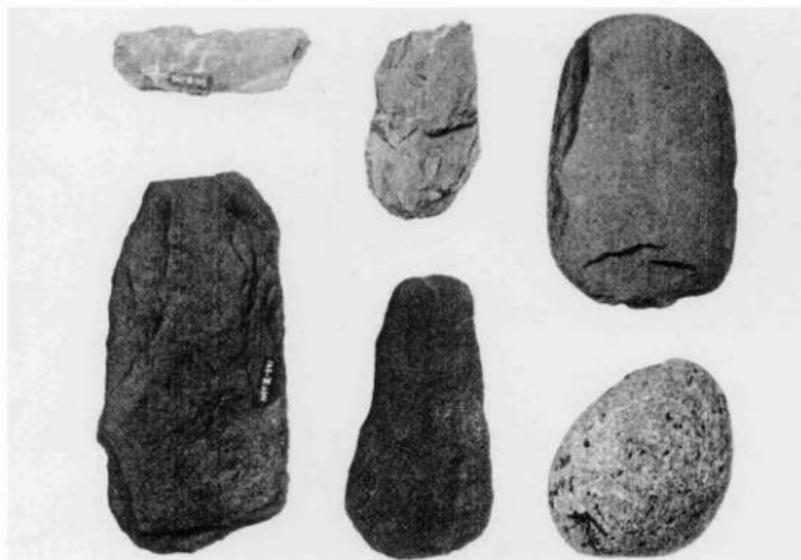
1. 縄文時代早期の土器（表面）



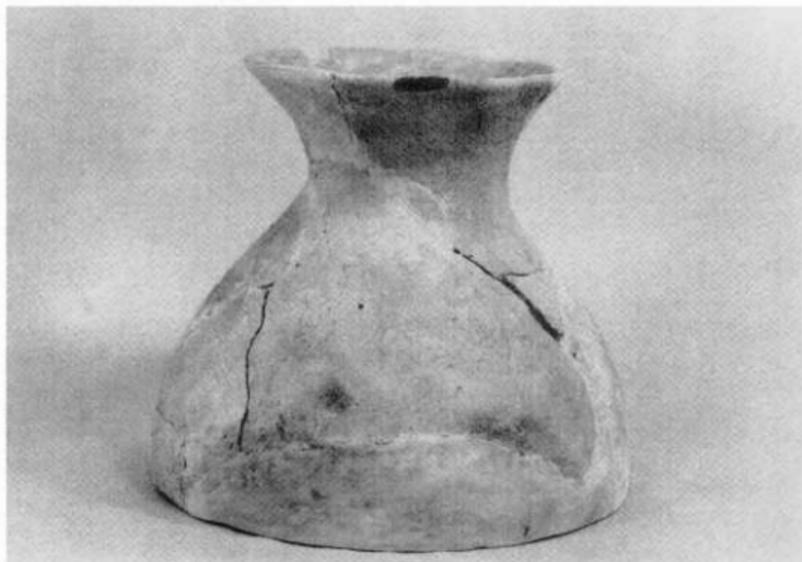
2. 同 上（裏面）



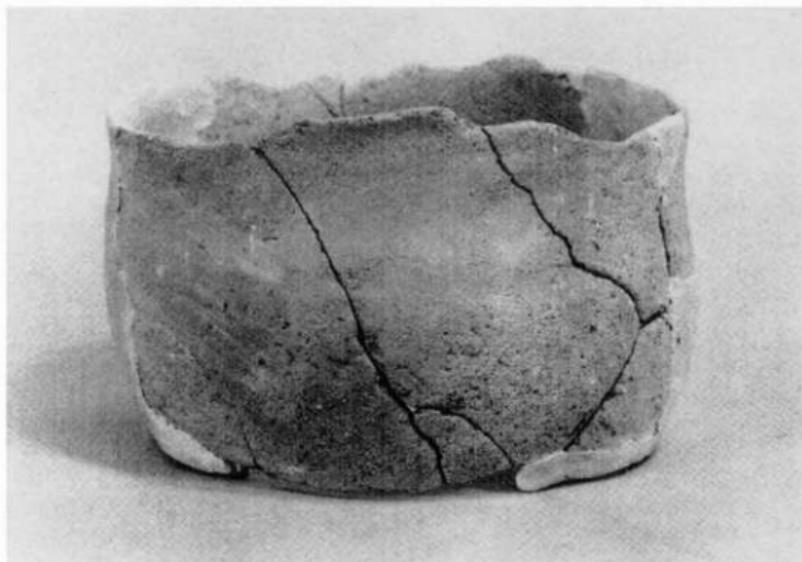
1. 縄文時代の石器



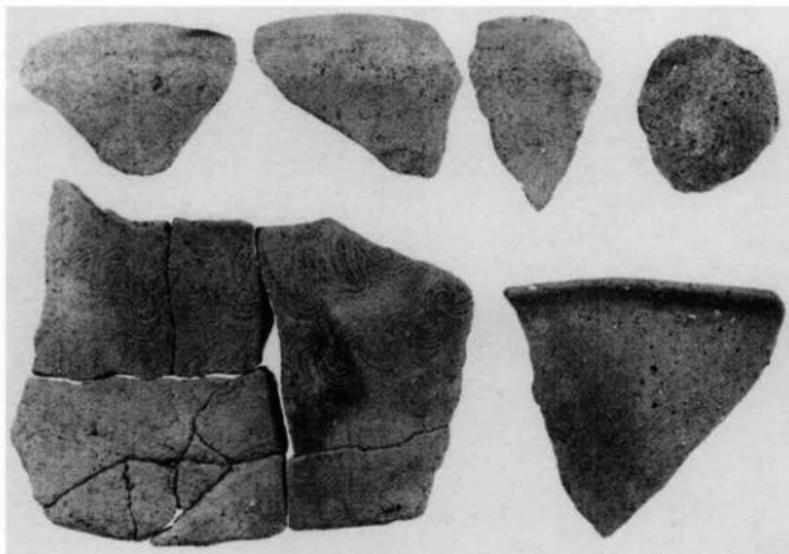
2. 縄文時代の石器（上段左は弥生時代石廬丁未製品）



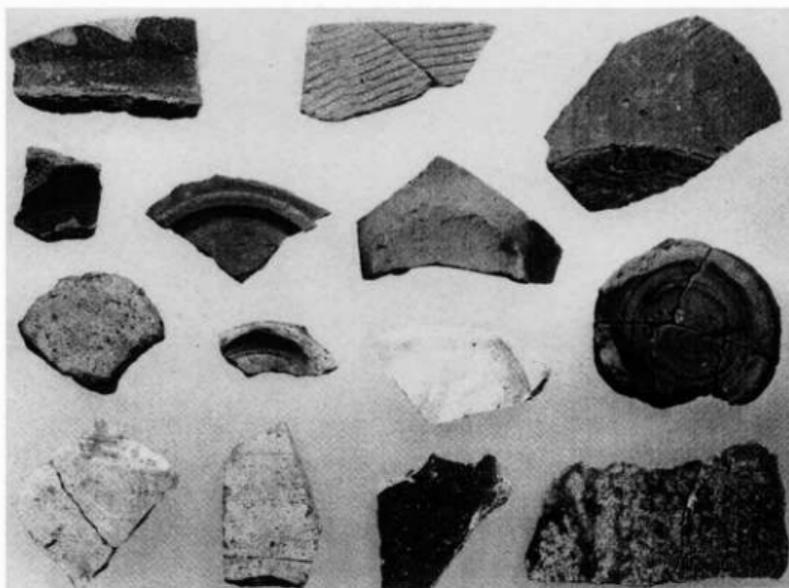
1. 第 1 号住居址炉内埋設土器 (1)



2. 第 1 号住居址炉内埋設土器 (2)



1. 第1号住居址出土土器（上段右は円板）



2. 平安時代以降の遺物

## 樋口五反田遺跡

---

---

昭和62年度緊急地方道整備事業（与地辰野線上伊那郡辰野町下田）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和63年3月20日  
編集・発行 辰野町教育委員会  
〒399-04  
長野県上伊那郡辰野町中央1  
☎0266(41)1111代  
印刷所 ワカオ印刷

---

---